

序章の



★三戦士追悼特集

——「ディア・ヤシン」作戦と世界革命



語りあえる仲間と 大はしゃぎ



くつろいだ雰囲気は“若さ”—— たらふく食べて大いに
楽しめる その日を力いっぱいすごしたあとは さえてる
味覚の大將軍——メニューも豊富、心はずむ本場の味
焼肉・中華料理は やっぱり大將軍 楽しい限りの大將軍で
和気あいあいの楽しい時をおすごください

ロース焼肉 スタミナどころ! **大將軍**

- 四条大宮大將軍ビル2/3F 841-9161
- 国鉄京都駅前大將軍2F 371-8090



心やすまる—— 印象的なムードをそえて

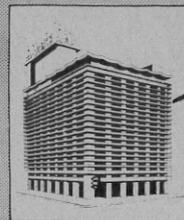
奏でる調べに心よせ かわず言葉に 落ちついたイン
テリアが そっと寄りそうとき……

満たされた本格的なヨーロッパ調が より印象的
な出逢いをつくります 静かなくつろぎのひとつに——

格調高い“シャトー”をぜひ ご利用ください

グランド 純喫茶 **シャトー**

- 四条大宮ニュー大將軍ビル地階1/2F 811-7038
- 国鉄京都駅前大將軍ビル地階 371-0089
- 西大路花屋町電停前 313-6770



四条大宮本店

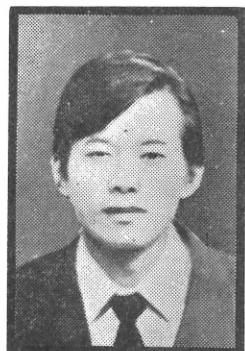


国鉄京都駅前店

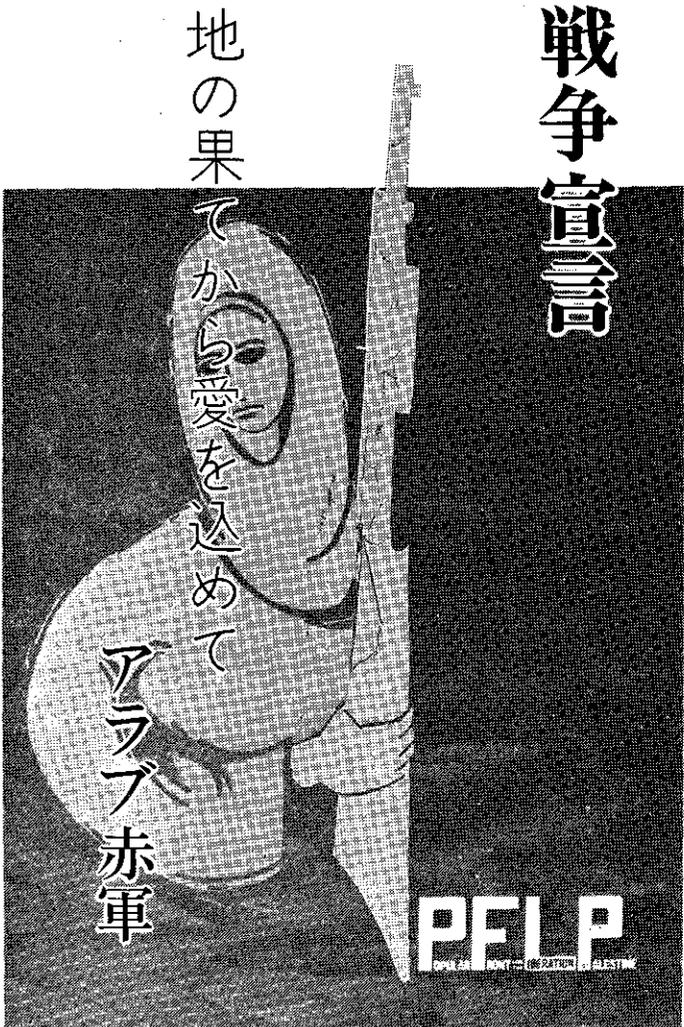
4月 / ●高槻店オープン!!



序
章
第九号



世界革命戦争宣言



★世界革命戦争宣言

六月四日

本日の六・一五集会に結集された闘う日本の同志たち、友人たち、在日朝鮮人民に、世界の人民戦争に連鎖し、不退転に闘いを続けているアラブ赤軍より、心からの熱い握手と、共に闘いを継続させることをよびかけます。抑圧された人民の熱い怒りは、益々世界中のプロレタリアの絆を一つにし、戦場を一つにし、敵帝国主義者と、その手先のどんな妥協の小細工も許しはしないことを更に武装で表現しようではありませんか！

我々、抑圧された人民の言葉は統であり、抑圧された人民のヒューマニズムが、武装闘争であることをはっきりと帝国主義者たちに教えてやる時なのです。敵帝国主義者と、その手先イスラエルシオニストのしりうまにのつた日本帝国主義の岡っ引き佐藤反動政府は、アラブ赤軍三戦士の戦争をヒューマニズムという彼等の言葉で陰へいしようと思死になつてゐる。彼等がヒューマニズムと言えはいうほど、我々は、抑圧さ

れた人民の歴史を想起するだけだし、抑圧されればされるほど、我々は、強くなるだけだということをも、更なる闘いで教えてやろうではありませんか。

宗教という情念を帝国主義と結合することによってシオニズム運動を人工的に創りだし、パレスチナ人民のすべての土地を奪い出したシオニストイスラエルに、我々の闘いが正当であること以外、何も認める権利はない。我々アラブ赤軍三戦士のパレスチナ戦争への参画は、国境を越えたプロレタリアの情念は、帝国主義者に抑圧されているという現実において一つである。パレスチナ人民と、世界の人民の利益の為に、プロレタリアの闘いが一つであることを表現した。我々は、歴史の帝国主義分割戦争によってひきさかれた国境を越えつつけるであろう。そして、現実が存在する生地日本革命に同時に責任を負うであろう。

闘う同志諸君、友人たち

世界の諸情況は、日本革命が、世界の人民戦争の波に連鎖し、共に闘うことを要求している。革命の根拠地は、人民であり、革命の世界的な逆流は、日本革命戦争の、巨大な成長をうながしている。歴史的に武装解除された情念を武装すること、歴史的に、日本人が自らの手で闘う術を発見した火つけ、うちこわしの様に。徹視的な情況認識は、武装解除された情念で、武器をとり、とりかえしのつかない失敗を犯すだろう。

同志たち、友人たち、父親たち、母親たち、国境を超えたアラブ赤軍兵士は、生活として闘いを知ったし、国境を超えた革命は、深く、日本革命にたどりつくだろう。我々は、歴史の中で革命の尊い犠牲となつた数多くの無名戦士のように自らの生活を、闘いとして貰くだろう。我々は、あらゆる困難を、我々のパトスのバネとするだろう。

三戦士の最後の言葉は以下である。

「我々は、どこでも死ぬ用意がある。そして、地獄でもう一度革命をやる為に先に行く。同志たち、友人たち、我々は決して失敗はしない。我々の闘いに対し決して、葬列をくりだすな、祝賀祭、こそが、我々の革命的死にふさわしい。」

六・一五集會に結集された闘う友人たち、死をいたむことなく、革命的に闘いの尊

い犠牲となった紳さんと共に、アラブ赤軍兵士の死を、祝ってやってみよう。革命は今のほりつめようとしている。あらゆるアラブ人民そして、エジプト、リビア、シリアなど、アラブ諸国の政府までも熱狂的に讃えられたパレスチナ人民赤軍兵士の熱い敵権力への怒りを自らのものにし、共に進まんことをよびかける。同志たち、友人た

ち我々の闘いの情念は、常に日本人民と共にあり、共に進撃していることをちかう。

一九七二・六・一五 集會にむけて
アラブ赤軍
在 アルジェ

★アツピール

六月五日

闘う日本の同志、友人たち

アラブ赤軍によって貰われた攻撃的陣型は今熱狂的なアラブ人民の歡喜を呼び起こしています。この歌と祝砲が聞こえますか？民族主義政府、リビア、エジプト・シリア・イラクなどの政府までも、赤軍三戦士の勇敢な国境を越えた闘いを一日中こゝ一週間支持する放送を流しています。

抑圧された人民は敵の攻撃によってめざめ、敵の抑圧によって益々強くなっていることをブルジョアジーは気付くのが遅すぎたようです。パレスチナ革命戦争を、世界革命戦争の同時・同質的な闘いとして、ブ

ロレタリア国際主義の先兵として闘いぬいた赤軍兵士が、日本人民に次のことを伝えてほしいと言っていました。

「国境を越えた闘いは日本革命を保証し、日本革命は世界の人民戦争を押し進める。日本の友人たち、行動と犠牲の上に雄たけく燃えている革命の歴史を継承し、世界の友人と共に進め、隊伍を整えよ、敵は一つだ。我々は日本人民の誇りを持って世界赤軍としてパレスチナ人民と戦争に行く。絶対に葬列はくり出すな。ただ祭りを我々と世界革命の友人たちの為に。」

世界の革命的同志たちとの連帯とは、フ

パレスチナ革命の状況の中で、最も有効に闘いを貫き、世界革命陣型の一步を担ったアラブ赤軍は、あらゆるテマゴギーをはねのけ、日本の同志たち友人たちが共に立ちあがることを呼びかける。

我々は日本革命——世界革命を多くのうちの一人一人として、共に想うだろう。

闘う日本の同志諸君、沖縄の抑圧された人民と共に、在日朝鮮人民・中国人民と共に、立ちあがった現職五自衛官と共に、自らの立場を明確に武装闘争に表現して進もう。我々を含むすべての「革命家」は高慢であつたし、一人よがりであつた。打ちこわし、火つけなど人民の戦うすべてから学

び、共に情念を武装しよう。我々はあらゆる困難を乗り越えて進む。我々はあらゆる場所世界人民戦争の兵士となる用意がある。闘う日本の友人たち、隊伍を整えて共に進もう！

★戦争を知らない革命家たちへのメッセージ

六月十日

地の果てから愛を込めて

すなわち必要なことは、国境とつばらい運動——世界革命戦争なのです。

戦争を知らない革命家は、歌を忘れたカナリアよりも始末の悪いものです。何故なら、さえずりすぎるものだから。

武装された怨念が、ひたすらに現実を憎悪する時、生活となった闘いがふきでる時、私たちは無言で自分の闘術を発明し、私たちは共に仲間の眼が恋人のようにいとしいことをしるでしょう。未来から過去の透明なまなざしは、今、私たちが、なんてへつぱり腰でやっているか気付くでしょう。

「武装せよ。武器をそして、手から一時も離すまいと誓おう。」爆弾を郵便受に入れることから始まったへつぱり腰は、ただただ自らの内在において武装解除していることを証明したのです。武装することは、銃が爆弾かなどという趣味の問題ではないのです。人民の創意しうる武装の情念を組織化すること。敵への確実な思想的・組織的・軍事的ダメージを与える為に。一つの敵にむかつて、現在なお、分断された戦場を一つの戦場すなわち、世界革命戦争場とする為に、世界の抑圧された人々が闘いつづけていることを、そしてその戦いが、いかに現実であるかを知らなければなりません

人。

帝国主義者の打倒の一点にこそ私たちの怨念ははきだされるべきであつて、仲間のつづつきあいには、もう何も生まないことを判つたと確信しています。

ナチズムの原罪意識にのつかった逆転した「ヒューマニズム」の強力な波は、帝国主義者の利益を代弁し、パレスチナ人民の権利を一切はくだつし、「イスラエル建国」の「悲願」を一九四八年に決めたのです。あの時から、帝国主義者によって人為的に創られたイスラエルと闘うパレスチナ人民は、問答無用に必然的に反帝闘争をベトナ

ムの人民と共に担いつづけています。国をとりかえず闘いは一切の帝国主義の分割戦争を粉砕すること、すなわち、世界共産主義にむかう道のりなのです。イスラエルに無実の市民がいるか？イスラエルに無実の市民が居るとしたら、それはパレスチナ人民の闘争と地下で共闘し、闘い続けている人々だけだ。しかしそれは市民ではなく、革命家であり人民である。

もつとも手を汚したくなかった、又は、汚れた手をたくみに隠していた筈の日本帝国主義者は、不本意ながら、さまざまの結果を生んでしまったようです。

イスラエルに、夜通しかけつけたにもかかわらず、イスラエルと日帝の汚れた手を握り合つたにもかかわらず、問題は、岡っぴき大将佐藤栄作にとつて、深刻となりました。

この三戦士による革命的闘いがすべてのアラブ人民に熱烈に支持されているが故に、すでに、日本商品ハイセキと、石油売買禁止の声がアラブ人民、アラビア語新聞、そしてアラブの民族的政府間からも湧きあがっているという現実です。

「世界革命の波を同質にとらえる」なんて格好の良いことを言う戦争を知らない革命家たちは、三戦士が現実には彼らの呪文を越えて闘っていることに気がつきがくぜんとして、日本革命の放棄的傾向などと欺け負しみを言いかねないのですが、日本革命の蜂起的傾向の萌芽がこの闘いでしじみみ判らない人々に、世界なんて軽々しく言ってもらいたくありません。

同志たち、友人たち

日本の岡っぴきに追いまくられ、ローラー作戦においまくられ、そのリアクションを、てぐすね引いて待っている岡っぴきの

波に乗るな！

私たちの戦争は公然とはじまっている。PFLPの同志たちと共に、ドイツ赤軍派の同志たちと共に、トルコ人民解放軍の同志たちと共に、世界革命戦争統一戦線の構築にむけて更に大胆に私たちは進む。そして、真に闘う日本のあらゆる友人たちと手をつなぐ用意がある。世界の帝国主義者打倒にむけて私たちの差し出す手を握りしめてほしい。そして日本の友人たち、私たちは日本革命に当然責任をもち闘うことを約束する。国外から現在しうるあらゆる協力を望んで引き上げる用意がある。

友人たち、闘いにむけて大胆に進もう。戦争は始まっている。

六月一〇日
在アルジェ アラブ赤軍派

★アラブ赤軍からのテーゼ

六月十五日

A 我々はテルアビブ銃撃戦をかく戦った

世界史的な帝国主義者間の抗争の展開は、一方の軸に巨大な世界プロレタリア独裁の萌芽を形成し、現在、世界的規模による真に闘う部分の結合—世界革命戦争統一戦線が、確実にその意識性を持って流動を開始している。特徴的には第三世界の武装闘争主体と、先進国階級闘争の質の結合として表現される都市ゲリラ派とか、過激派とか呼ばれるもつとも先鋭部分との武装闘争の共有に表現される。(トルコ人民解放軍の在トルコ、イスラエル高官殺害、ドイツ赤軍派によるベトナム侵略反対のアメリカ兵の誘拐、日本赤軍派(在アラブ戦士)によるテルアビブ空港襲撃、ヨーロッパマオイストによるベンガルディッシュ支援ハイジャック、ドイツ赤軍と、パレスチナ戦士による日本赤軍戦士岡本同志の奪還闘争。etcが目につく)。

こうした世界革命戦争統一戦線構築にむけた意識的な闘争交換の戦術は、日本赤軍派が、六九年六月、世界党—世界赤軍—世界革命戦略を定立した世界史的認識が、その矛盾の直接的、集中的環としての第三世界人民によって、敵との攻防の中で、実践的な行動様式として登場しているという現実であると言える。

パレスチナ革命においては、シオニズムと対決するパレスチナ人民の闘いの質が、自然発生的に世界革命戦争へと、その回路をたどっている。それは、シオニズムの第一次大戦以前から現在に至る歴史的経緯の中から証明されるようにシオニズム運動が、世界の帝国主義者間の抗争の巨大なヘゲモニーを持つており(流通機構、通信機構、宇宙に至るブルジョアジーの戦略的利益を、シオニストがかなりにぎっていること)中東に人工的国家イスラエルを設置することによって、第三世界の自然源(石油、ウラン、ダイヤモンド鉱石)搾取、収奪する拠点

となつており、一方ヨーロッパ、アジアを共産主義運動から防衛するための、世界帝国主義の戦略的位置にあり、イスラエルの存在そのものが、世界の帝国主義者の表現なのである。それ故、イスラエルに奪われた土地をとりかえず闘いは世界的な帝国主義者の利益のとりかえと化しているイスラエルと闘うことが、即、世界のシオニズム運動に連鎖した世界の反革命と闘うこと、すなわち世界革命への道へと、必然的に自らの主体を実践的に闘いの中で、位置させてきた。パレスチナ人民の闘いが、そのことを明確に証明している。それ故、存在として第三世界でありながら現実には先進国革命の二重の戦争形態が要求されており、その必然は世界中を戦場とせざるをえないのである。

こうしたPFLPを軸とする世界革命統一戦線構築の作業は、経験的な良質さから問題意識として発生しつつも未だ世界革命の組織戦略として登場しえていないが故に、戦術的であり、世界革命統一戦線が単一の

世界党——世界革命軍という質を内包しき
れているとはいえない。しかし、こうした
PFLPと共に、戦略次元へとその問題意
識を対象化するいくつかの主体へ××××
××、××××××××、×××××××××
××、日本赤軍（在アラブ）によって、
総体を組織戦略としての世界党——軍——
戦線へとその国際地下兵站線を絆として確
立する主体構築の闘いが、現在の世界の戦
争派を吸引する環となっている。

一九七一年二月、日本赤軍派と同一の意
識性を持って「赤軍派を世界の人民戦争の
波の着実な相互逆流を通して、戦略的に主
体を構築する」という意志統一のもとに、
アラブ支部建設におもむいたアラブ赤軍は
一年有余に渡る世界の各戦線との認識の交
換、PFLPとの共同武装闘争の貫徹をも
って、その更なる主体の世界的人民戦争と
の実体的連鎖を持続しつづけて来た。しか
し同時に日本赤軍派との同一の意志で世界
に出発した日本赤軍派IIアラブ赤軍の、日
本への質的な戦争の逆流は、不完全なまま
アラブと日本の赤い共通の糸をはっきりと
全人民の前に表示するところに至っていない。
このことは日本赤軍派の構成部分であ

矛盾はいかにいつつも、自分の居住する
歴史的情况に制約され、主観的な認識との
分裂的発達が益々存在を一国に固着させて
しまふという結果を生んでいるように思わ
れる。

こうした観念の世界性という認識を打ち
破る闘いこそ、アラブ赤軍によって表現さ
れたテルアビブ空港襲撃による実践を通し
たアンチテーゼなのであった。主にその
ことを意識した闘争であったと同時に、パ
レスチナ・アラブ大衆に勝利の確信を伝え
る闘いであった。（アラブ諸国政府が、イ
スラエルにたびたび攻撃をうけつつも、国
連に苦情をうったえるというだけで、大衆
はイスラエルの不敗を確信しつづつあつたし、
パレスチナ大衆・アラブ大衆、世界中にみ
すてられたという孤独感を強くもつていた。
この闘いのあと、数千キロ離れたところで
も我々を忘れていないという大衆の強い確
信は停滞していた状況を再びフェダイン
志願としてぶちこわしつづあり、日本政府
の対応にアラブ人民は日本商品ハイセキと
石油売買禁止の声でこたえ、クウェート、シ
イラク、エジプト、リビア、アルジェ、シ
リアを含む民族政府が闘いをたたえ、生き残

つた我々が、国境を越えるという現実の中
で世界の戦争を体得しつづもそれをベネと
して、日本赤軍派の強力なテーゼを通して、
日本革命戦争派への再編をしきれなかった
という自己批判的な認識を持つている。し
かし一方、日本赤軍派の我々への対応が如
何なるものであったかも同時に問われねば
ならないという考えに立っている。アラブ
赤軍建設の苦闘の当時日本赤軍派がいか様
にアラブ赤軍に対応しようとも、我同盟結
成以来の不屈の同志愛を軸とした政治的確
信のみが、我アラブ赤軍の発展を支えて来
たと思ふし、獄中で不屈に闘いつづけてい
る真の同志への尊敬が我々を支え、つき動
かしてきた様に思う。もちろん、PFLP
を中心とするアラブの、世界の、多くの同
志とのリアリティーによって、政治的確信
が我々を自ら高めつづけてきたということ
も当然の事実であった。

事実関係を提示すれば、日本赤軍派から
の通信は一九七一年二月よりわずか三回に
とどまっており、七一年一月をもつて、
我々と日本赤軍派との関係は音信不通とい
う結果となっている。支部建設準備から現
在に至るまで、物質的・人的な援助は一切

つた同志岡本への全面的な支援体制を開始
している。一方そして占領地の闘いでつか
まつて、六月、イスラエルの軍事法廷に判
決のためにつれてこられた十八才のフェダ
インは、イスラエルの、何か言うことは
ないかという質問に対し、「I'm very sorry,
because I could not fight with Japanese
Red Army comrades at Tel Aviv Airport.
I had to do it」
と泣いて、いかに自ら死を課すかとい
う声は、巨大にパレスチナ人民をゆりうご
かしている。我々アラブ赤軍にとっては、
ここに、日本の同志殺害のあと革命戦争
でいかに闘い、いかに自ら死を課すかとい
う根底的な、共産主義者としての革命家の
感性を、自らの死を持って、日本人いや、
日本赤軍派に提示した闘いとも言える。敵
と直面した攻防の中で結晶する同志愛は、
ベトナム人民の様に自らの力を二乗倍にす
るし、これが根本的な戦力なのであると我
々は確信している。

そのことが判らない恐怖政治には、革命の
前衛を名の資格もないし、その素質も、ま
まったくないのである。我々はそれ故、森

なかった。その意味では日本赤軍派に対し
日本革命を領導しうるいくつかのうちの
一つという認識しか正直なところもちあわす
ことが出来なくなつていった。同志殺害の
後、一九七二年四月、日本赤軍派再建の任
にあたつてはいる同志から一通の手紙をうけ
とつてはいるが、現在の状況はその責任関係
などがまつたくはつきりしていない。現実
の武装をあらゆる形で共有すべく準備した
我々にとつて、日本赤軍派の対応は不備の
連続であった。（日本赤軍派は多分、アラ
ブ支部から強力な援助をうけるか、京浜安
保とくつつか、どっちも自力更生の精
神がなかった様に思われる。京浜安保との
合流に至る前の二通の手紙は大変調子が良
かったから。こちらはその様に推測してい
る）何故なら現実の武装の問題を、広告材
料にかんちがいするという状況であり、危
険を伴う（協力してくれる同志すべてを、
敵の情報のおしこめてしまふ）と判
断せざるをえなかった我々は現在軍事を軸
とする世界革命統一戦線の構築の途上にあ
りながら、合法活動のみ提供する（アラブ
情況などの文章化）という形態をとらざる
をえなくなつてはいる。世界と一国の主体の

同志に表現された犯罪的結果を責任をもつ
て裁くうちの一人となるであろう。と同時
に、我々自身も又、裁かれる側にあるとい
うことをはっきりと認識しているし、そう
した立場から、世界党——軍——戦線構築
の任を引きうけつづけるであろう。

B 世界赤軍構築に向けたアラブ赤 軍からの予備テーゼ

（ほとんどの赤軍派及び諸党派の文章、
パンフ類が半年以上手に入っていない情況
にあるので獄中の同志たち、諸党派の認識
がどの様な経緯にあるのかさだかではない
が、一応我々アラブ赤軍派の、世界党——
世界赤軍——世界革命統一戦線構築の革命
戦争途上の世界と日本にかかわる問題点に
ついて簡単に展開しておくべきだと考えて
いる）

① その歴史的な位置

世界的な波が、第三世界の武装闘争を軸
として、国境を越えた闘い方を引き出し、
世界的な革命戦争に至る対峙段階にあるこ
と。第三世界の人民、それに連鎖した先進
国の武装闘争派が意識性としても、実践の
形態からしても、帝国主義者の弾圧を攻勢

としてその対峙段階を表現しており、先進国のゲリラ戦による味方内部の質と量の拡大が、第三世界の戦線（前線）を後方として支え、逆に第三世界の国境を越えた闘いが先進国の後方として支えるという相互関係から戦線（前線）と銃後が常に銃後と戦線（前線）として敵に對置しうる質的な位置にあること。第三世界の後方としての先進国の闘いの質が、戦線（前線）としてその抑圧者の命にとどめをさすか否かが総攻勢へのカギとなっている。

② 戦争

ゲリラ戦は、世界的に戦略的位置をしめており、組織戦略の統合の環となっていること。その目的意識的な闘い方こそ、世界の戦場を一つにする方法であり、（総攻勢に至るところの）ことに、先進国のそれが間われていること。しかしながら、なんといおうとも、日本の革命戦争の流れの中に自然発生的な闘い方としてしかそれが定着していないこと。諸党派の「目的意識的な闘い」という言葉に表現される闘いが、歴史の流れの正直な答えによれば、結局は、いわゆる「ゲリラ戦」が、ゲリラ戦でなく、近視的な日帝のリアクションとしてしか存

在していないという事実をあげることが出来る。日本でのゲリラ戦は、七〇年ハイジヤック闘争にはじまり、その後、無に等しいというのが歴史が証明している事実といえる。

③ 長期的持久戦であること

それ故、革命戦争は世界プロ独運動を、世界の革命勢力との相互の認識を一体化するという共産主義化の闘いを、国際的地下兵站線（戦士の交換など）の実践を通して前線―銃後―銃後―前線の、世界的同志的絆と、同質化を必要としていること。主要には、日本赤軍派が、先駆的ということにおいてであれ、日本革命を領導して来た事実をふまえ、もつとも困難な中で、もつとも困難な方法で、あらゆる日本の革命主体に現実の世界の流れを着実に武装闘争で伝達し、日本革命戦線を網羅するという作業こそ、逆に、世界の人民戦争の流れ、ことに現在構築されつつある世界革命戦線の主要な担い手として、説得力を持って世界史を領導するカギとなること。アラブ赤軍は、日本革命にとつては、現在の対峙期には銃後として位置しており、前線は常に、日本の風土、社会、歴史に規定された日本人民

を解放革命する作業の主体者たる日本赤軍派であること。この陣型を軸に、持久戦争を勝ちぬかねばならない。

④ 党―軍のあり方

日本の現在の状況の中で、人民を領導する党は大衆の武装の情念を引き出すためのゲリラ戦を通し、自らの存在を確固とした共産主義者の党に高めない限り、再び、唯武器主義に転落してしまうということをはつきり認識すべきである。闘いは、武器の問題でなく、武装の問題であり、大衆と同次元の意識性、献身性、勇気しか持ちあわせておらず、大衆より学問的にマルクスを知っていることをひけらかしても、大衆はみちびきの糸として確信的に続くよりも、うんざりするのが常である。

プロレタリア世界そのものが、世界党―軍としての実態をいまだ持ちえておらず、その意識性に支えられた世界革命戦線への萌芽であるという世界共産主義政治の現在段階をふまえ、日本赤軍派は自国、世界（世界に直接かかわっている支部）の主体構築の作業の指定をぬきに、ゲリラ戦を展開しても、日本の革命主体に対する提起（統合の軸）にはならないことを心に銘記

すべきであり、いいかえれば、日帝の政治過程を軍事的に、リアクションとして闘いつづけるといふ旧来の闘い方だけでは戦争を準備する党としてのヘゲモニーがいつまでたっても確保されないことを知るべきである。

「大衆との共存関係」戦闘にいたる勝敗の八〇％は調査活動にある」という戦闘の原則を、軍事という言葉で合理化し、いわゆる「軍人」のみに党のヘゲモニーをゆだねようとする建軍活動とは、潜在軍事の質を切りすて、顕在軍事のみで闘おうとする敗北主義の道であり、プロレタリア革命の道案内人―すぐれた共産主義者である革命家を主体の側に創造する可能性を合理化するものである。党―軍という発想に欠落する未来の表現者としての共産主義的人格を根底から発見し、その過程における党の軍人化と軍の共産主義化を勝ちとらねばならないと考える。それは言葉のいじくりまわしから離れ、自らの力量を客観的に計算し、党の現実段階における能力に応じたゲリラ戦を準備し、勝ちぬくその過程こそ、日本革命派統合の道であり、軸であることを再度わきまえるところから始めなければなら

ない。

⑤ 反スタ戦略派との徹底的な論争が必要である。

歴史性からのスターリニズム、修正主義の把握をぬきにした反スタ論は日共へのアンチテーゼとしても、大衆に有効性がないばかりか、革マル・中核に表現され、感性的に森グループにもうけつがれている反スタ主義者によるスターリニズム（又は、もつと腐敗し、革命の歴史性を持たないブルジョア政治）は、世界の革命戦争の現実と日本の革命戦争の中で客観性を欠く一助を担っている様に思われる。一国主義政治を打ち破る我々の組織戦略は世界革命戦線構築の、長期的な過程を経て、「社会主義」国家群を二者択一的な情況においつめる、「労働者」国家内部からの反修闘争を、世界革命戦線の共通の担い手としてその組織化を、実態的な連鎖とすることである。無責任な反スタ戦略は、自らを自閉症にするし世界の人民戦争の中で、輝かしく戦略的立場をわきまえつつ闘っている（又は、支援している）いくつもの歴史的制約の途上にある「一国社会主義」国家の限界としてとらえず、敵対関係に陥らせてしまうだけ

である。真の革命に敵対するソ連に表現される修正主義路線を粉砕するということは、自国の闘いの自力更生を基調とする世界革命戦線構築の実践的な世界共産主義政治再編の中に位置している。

⑥ 単一世界党―世界赤軍―世界革命戦線構築にむけて

実態的な自国での闘いに裏打ちされた戦略論が、世界革命統一戦線の領導の環であり、国際地下兵站線の確立活動（世界革命の永続性を保障する各国革命主体への質的な銃後の形成であると同時にこの確立にむけた闘いは、世界の帝国主義者と物質的に対峙する闘いであり、ことに第三世界の自然源―多くの民族解放戦線が解放区にそれを管理している―を、革命主体の共有財産として、革命派内部に生産活動を獲得し同時に帝国主義者の戦略的野望、自然源の略奪を阻止し、世界帝国主義者の再生産をプロレタリア階級の生産活動へと拡大発展させる対峙を作りだすという二重の意味を負っている）の中に、単一の世界党―軍の質を世界革命統一戦線構築の表現に内包しつつ、他組織との批判運動を通じた同質化を

る。そのことは、日本国内においても同様であり、純粹軍事を、又は他方、純粹戦略論を他党派との結合の軸とするのは誤りであり、世界の戦争発展を意識的に逆流し、認識論を一体化させるという方向に、組織実践をわきまえないければならない。すべて現実を見ること、かごと、知ることから出発するのである。

以上、概括的な意志統一を軸として、アラブ赤軍は闘いの持続発展の任にあたる。日本の同志が考えきれない程、世界は狭く世界の同志が確実に同じ情念を持って一つの敵にむかっているという認識を我々は持っているし、それは日本の同志にも共有してほしい情念である。

日本革命戦争の銃後と同時に、パレスチナ革命の前線を担う我々の母体は日本赤軍派であり、戦争の永続性を内的、外的に保証しうる国際的な地下兵站線の形成とは、世界の戦争派並びに日本革命への援後射撃であり、アラブ赤軍はそうした位置をふまえ、自らの力量に応じた力を発揮しつづける用意がある。もちろん、この地における敵と味方の力関係（味方を限定的につつまこんでいるアラブ進歩勢力（国家）とは抗

その質を更にふみこえてつきすすんだアラブ赤軍兵士）の質は、敵との関係など場所的に違う状況とはいえ、世界革命を領導するはずの日本赤軍派戦士が確保しなければならぬ内容であり、それは抽象的な論議ではなく自らの生活様式を、情念を、徹底化する作業としてあり、もともと抑圧された日本の中の人民との謙虚な結合、根底への接近、同質化を通して始まるであろう。あらゆる反権力の闘いを革命主体の空間に位置させるといふ作業、プロレタリアの能动性を組織化する人民の導きの糸となる前衛の任務を、もともと困難な中から学びとるといふ赤軍のこころ・フェニックスとしてにはばたくことこそ、今、日本赤軍派に課せられている歴史的榮譽ある任務としてあるはずである。

C 日本赤軍とアラブ赤軍の任務

イメージの先行的確信に裏打ちされた赤軍派の戦略論は、いまだザル的なところがないとは言えず、ことに現実の世界と日本のかかわりの組織論的な指定が不十分なために、日本赤軍派とアラブ赤軍の関係が明確でないことは相互の作業を困難にして来

争的でありながら協力関係にある）が、更なる味方内部の強化へと発展しつつあるアラブの現段階と徹底的な少数者としての自らが、日本革命の勝利にむけて困難な中を歩きつづけている日本の同志との状況には闘いの方法、戦争の認識も、現在差異はあると思うが根底的には世界革命戦争に至る闘争に内在する世界共産主義運動という一つの流れに位置しており、一つの敵にむかつて戦場を一つにするための人類最後の世界革命戦争であるという同質の方法と認識の上に立つことこそ、自国での戦争形態が発揮されるものと考えている。

共産主義者であり、革命家であるという自己変革が主要に、三月以降問題になっていくと思うが、自らの任務を死と引きかえに闘いぬくという犠牲性と献身性を通して闘った結果として生き残るものしか、自らのプチアル性の解体は困難であろうし、現在の日本の闘う同志たちが青砥同志（敵に知っているすべてを売り渡している。デマも真実も含め、とにかく知っていることを言っている）の様な弱さを露呈するのは個人的な問題というよりも、同盟の総体が、共産主義政治の団結と、兄弟愛を軸に形成

た。そのことを経験的な立場からイメージを確定し、関係を明確にしたいと考えている。

① 旧来の第一インテラーから第三インテラー（第四インテラー）に至る国際共産主義運動の歴史的な位置と、その限界をふまえたうえで、我々の世界党—赤軍—世界革命戦争統一戦線の主体構築の闘いが単一の世界党建設を掲げ、軍事兵站線を軸として潜行的に準備する国際地下組織に保障された世界革命戦争への道であること。

この質にささえられた世界革命戦争統一戦線構築の過程は、世界各国の革命派物質的軍事的表現として世界共産主義政治を再編する位置にある。（その認識のもとに、在外支部は世界の革命派との批判—自己批判を運動として同質化させる作業を開始している）

② 現在、本来的には日本赤軍派は在外支部建設の母体であり、在外支部の認識を常に相互に同質化させる主要な位置にあり、その作業を通して自らの存在を、日本一國に規定された関係を越えて逆に日本革命への実際の指導を可能とするのである。在外支部は、支部のある場所における前線と

されていない表現とも言えるのである。こうした「同志」が限る限り、アラブ赤軍の日本赤軍派への対話は成立しえない。もしも我々が機密を伝え、それが「同志」を通じて敵につつぬけになるなら世界の革命主体を裏切り、敵に売り渡すことになるのだから。敵はCIA、イスラエル秘密警察に表現される白色テロ団であり、萌芽しつつある真の戦線はひとたまりもなく一瞬にして世界革命の展望を喪失するだろう。そしてそれはあとでいかなる責任をとってもとりかえしのつかないことなのである。

パレスチナの戦士たちが、いかに敵を殺すかという感性と日本にいる戦士がいかに敵を殺すかという感性には、決定的な違いがある様に思われる。すでに生活体験として、敵と肉体情念でたちむかうパレスチナの戦士たちにとつて、いかに殺すかという感性は、同時に自らの死の当然性をこえて闘いにいどむことを意味しているからである。しかし、日本の同志が、いかに敵を殺すかという場合、自分を決して危険な場所におかない様にはか戦っていない。我々は、はっきりとこの違いをみとめなければならぬだろう。このパレスチナ戦士（そして

しての任務を、場所を共有する同質の革命派と共に軍事的にも担い、主体を世界に高めつつ、世界党建設の意識性を堅持し、日本革命の銃後としての（すべての世界革命主体への銃後となるが）国際地下兵站線を潜行的に準備し、その一個三重の闘いは世界党の萌芽を、日本赤軍派と共に担う位置にあること。

③ 在外支部は、赤軍指令部に直結し（現段階では本来的には母体たる日本赤軍派の軍事政治最高指令部）現段階で、各在外支部の責任者は同時に日本軍事政治最高指導部の一員であり、その指令部体制は世界党の萌芽の根幹となるべきである。在外支部の責任者ならびに在日指令部の代表は年一回定期的な会議を労働者国家などで持つことによつて、相互点検し合う。（指令部の事務局を設置し、各支部の連絡にあたりこれは指令部の統括下におくべきである）

現段階におけるこの軍事政治指令部は、日本革命の責任ある主体として日本革命派を準備し闘いを持続させるといふ最大の任務に集中することこそ、在外支部の質を逆に強化するのだということを確認したい。

④ 自国帝国主義打倒を實態的に闘いぬくその内的な発展は、日本赤軍派及び在外支部の世界革命戦略の物質化にはかならない。しかし、在外支部の闘いは同時に、在外支部の存在地では勇敢に戦場を他の革命派と担うという観点があり(このことぬきに、しやべりまくっても同志的絆はうまれない)そのことをぬきに、日本赤軍派が機能として在外支部をとらえるという対応(過去一年有余はまったくそうであった)は、国際主義の現実に敵対するのだということを忘れてはならない。

⑤ 日本における革命戦争の発展は、世界の戦場を銃後としてささえる国際主義の位置にあり、(ベトナム、パレスチナ人民の闘いにとって日本革命の発展は現在後方としての巨大な役目を果たす)それ故、在外支部の闘いは日本革命と強力に連鎖した戦略の次元で軍事政治組織総体に渡る絆を必要とする。在外支部の活動そのものが間接的、媒介的な、戦術次元ではないこと。この戦略的相互関係こそが、世界革命—日本革命の永続的な表現となる。

⑥ 国際地下兵站線を真の革命派の武器となる様建設する闘いは、国際根拠地化への

実体的な布陣であり、この建設過程における修正主義政治路線との直接的間接的対決は三プロック階級闘争の統合を必然的に軸化させ、真の革命派のヘゲモニーを逆に登場させ、世界的な革命と反革命の中間に位置する「労働者」国家や民族主義国家を分解し揚する萌芽を担う。

⑦ 各在外支部(これは世界中に三つで良い)は、相対的独自の運動を展開しつつ、在外支部責任者を通じた在日指令部との不連続の意志統一による党—支部の関係を堅持しつつ、相互批判を通して常に自らを世界へと位置づけること。

Cに①—⑦として、提出した問題はアラブ支部の現実的要請であり、現在の段階では日本赤軍派そのものの実態・存在も判らないが将来的にはこうした関係に質的結合すべきと考えている。と同時に我々の母体再建にむけて可能な努力を貫くだろう。

この再建過程において「森一派に反対であった」という免罪符でよせあつめたに再建が進むなら、自らの日和見を合理化した部分、闘いを放棄した部分を包含せざるをえないし、我々が日本の同志たちに要請するのは、真に革命に自らの生命をささげよ

うとするひたむきな戦士の結合によって、小さな核からでも出発してほしいということである。もっとも困難な状況で、もっとも困難な方法で常に打ち勝ってきた我々にはそれがふさわしい。

待つこと、耐えること、思いきること、忘れることは、勝つことと相殺なんだと思う。三戦士は日本革命派への熱い愛と連帯をこめて、喜びに満ち、荣誉ある闘いを貫ぬいた。世界赤軍への萌芽を担った彼らは「我々は地獄で再び革命を準備する。先に行って用意している」と言い残して出かけていった。

日本の同志諸君、共に大胆に進もう。獄中の不屈の同志たちへの限りない尊敬をこめて。

〈アラブ赤軍 六・一五〉

① アラブ赤軍とは正確には、日本赤軍派在アラブ支部である。

② 我々が問題提起の対象としている日本赤軍派とは、正確には日本の革命戦争派(頭在・潜在を問わず)である。

③ 大衆という概念はあいまいであるが、まさしくそのあいまいに存在しているところの人々を含んでいる。

★国際主義の問題について(テーゼ・補)——七月二十日

今、日本革命にかかわる革命家の前に、一國主義者か、国際主義者かを例外なく問う事態が発生している。長い革命の歴史の中で、カウツキー主義者が常にそうであったように、革命史の現実が、目前に自らをも包摂する力として表現された時、それを、科学性・歴史性を持って対象化しえない結果として、一國主義者は常にブルジョアジ—の側に大衆を領導する役割を果たして来たのだ。

ツインメルワイル左派によって引きつがれた国際主義者の普遍的質は、視点を変え、しかし、歴史的な革命の道のりの中で、同じ様に問われているのだ。

すなわち、抑圧された人民の側に立つという世界史の創造を受け持つ真の国際主義者の側に立つか、革命的言辞による社会排外主義的認識の庇護の側に立つか?が問われているのである。

域内の「平和」を主張したカウツキー主義者の眼が、実は、階級対立を民族間問題に

すりかえる結果を証明した様に、世界の抑圧された人民との、根底との結合を、革命的言辞ですましてしまい、自らの域内、日本民族的尺度と思考性に無自覚に依拠している現代カウツキー主義者が、革命戦争派を自称する中まではびこっているという事実を、我々は驚きを持って知った時、この歴史的現実が日本階級闘争の認識論の限界として、必然的に結果している一つの証であることもまた、痛切に知ることが出来た。(この現代カウツキー主義者が無自覚であるがゆえに、真の革命派に益々全面的に敵対してくるということを忘れてはならない)。

アラブ赤軍・PFLPの世界革命戦線構築にむけた共同武装闘争、テルアビブ攻撃の国際ゲリラ戦を、全面的に認めるのか否か、この選択こそ、国際主義者として世界革命の任務につくのか、よかれ悪しかれ、ブルジョアジ—の側に立つのかの岐路であり、よけて通ること、中間の評価を許すこ

とのない、日本の革命家にとつての歴史的メルクマールである。

自称国際主義者が、実は一國主義者であることを証明し、その一國主義的思考を無自覚化させている原因は、以下の三点にあると思われる。

① 世界史的な階級闘争史の無知から来る独断による一國主義者への脱落。

歴史的な帝国主義者の分割戦争と、シオニズムによって作りだされた中東の階級闘争史を正確に把握することが要求されている。「イスラエル国家」が存在しているという認識は、すでに国際主義者の失格者である。これは、中国が二つ存在しているという帝国主義者の論理同様、国連という帝国主義者のおしやべりの場でのみ承認された事実であり、真実ではない。

一九四八年、国連案としてアメリカ帝国主義者と、ソ連スターリン主義者が共謀してつくりあげた「国家」であり、その国連の承認によって、実力でパレスチナ人民

を追い出し、創りあげられたアメリカ帝国主義の軍事基地が「イスラエル国家」であり、中国に表現される「労働者国家」は、イスラエルを国家としてみとめていないし、プロレタリア国際主義者の地図に、二つの中国がない様に、イスラエル国家という地図はない。

一九四八年以前に共存していたユダヤ人民とパレスチナ人民の抑圧の上に、シオニストによって作られた占領であり、それを実力で解放する作業は、プロレタリア革命の実践者の任務である。

民族解放社会主義の事業の闘いの中で、敵シオニストが世界帝国主義の主要な軸であり、世界革命の勝利まで闘争が持続するということを明確にしたPFLPの路線が、世界革命統一戦線の第一歩をふみだした同質の闘う部分との共同闘争として、必然的に我々との結合を開始したのであり、この闘争によって、世界の革命派が、世界革命統一戦線の志向性を持って結合を開始していることは、プロレタリア世界革命の巨大な前進である。

ヨーロッパ、アメリカ等の都市ゲリラ派は、シオニストに明確に革命を妨害されて

ている。今回の闘争に關し「無差別殺人」と認識することから出発する闘争の評価は、すでに、帝国主義者とシオニストたちの土俵の中で、左翼づらをして、おしゃべりをしていることの表現である。

テルアビブ攻撃闘争は、帝国主義者とシオニズム、そして、その同調者への軍事・政治攻撃であり、その正当性は、歴史が証明するであろう。

プエルトリコ人、ユダヤ人総体に敵対した闘いであるというのは、シオニスト・帝国主義者の手先、ブルジョアマスコミの一方的宣伝である。事実「イスラエル国内」のユダヤ人非合法組織は、闘いの支持を表明し、プエルトリコの闘う人民は「我々抑圧された貧しいプエルトリコ人民は、世界の

いるので、我々の闘争を全面的に支持する立場に立つのである。(アイルランドのIRAの闘争などは、シオニストと英帝に日夜弾圧を受けている。日本階級闘争は、シオニズムとは直接的な対決を持たなかったが、世界的には、CIAと同質の任務をシオニストが果たしており、ユダヤ人民とも敵対していることを忘れてはならない。)

パレスチナ革命に対する我々とPFLPその他、マルクス主義者のグループの認識は、階級闘争であり、民族間対立でも、宗教対立でもない。シオニストを中心として、それに忠実に従う日本のマスコミの、ユダヤ人対アラブ人、または、モスリムとクリスチャンの対立という報道操作は、デマゴグ以外の何物でもない。事実、アラブ各国に百万のユダヤ人が住んでおり、アラブ人民、アラブ政府も、これらのユダヤ人に敵対していない。

また、「イスラエル国家」の中で重要な帝国主義者の手先として手をくんでいるアラブ・パレスチナブルジョアジーの存在もある。このことは明確に、シオニスト帝国主義者と抑圧されたパレスチナ・アラブ、そしてユダヤ人民の階級闘争であることを物

人民の認めていないイスラエルに行くことではないし、プエルトリコの闘う我々は、PFLPと赤軍によって闘われた闘争を、同胞が殺されたからと、敵対することはない」と言明している。

抑圧された人民が、闘いに行く以外、行く意志を持たない「国」が「イスラエル」だからだ。そのことを、日本の一國主義者はまったく気付かず、プエルトリコ人は貧しい抑圧された民族であり、ユダヤ人はファシストに虐殺された民族であるという、階級性ぬきの、ブルジョアマスコミのニュースから、闘争の評価をおしはかろうとしており、世界の抑圧された人民(民族ではない)に、実は敵対していくのである。

また、日本帝国主義者と、そのマスコミ

語っている。帝国主義者の基地「軍事国家イスラエル」にむけて、最大限の戦いを続行しているのは、当然の、プロレタリアートの使命感である。それゆえ、今迄、パレスチナゲリラ、ユダヤ人非合法組織が「イスラエル国内」の内の人民(?)に被害を与えない闘い方をしていたのに、今回は無差別テロであるというのには、日本帝国主義者の都合の良い論理であつて、一九六七年、ゲリラ組織が活動をはじめて以来、今日に至るまで(そして今後もまた、そうするであろう)が「イスラエル」が、アラブ人民を理由なく殺しているのと同じ方法で、市バス、スーパーマーケット、映画館、レストランホテルを、連日、破壊しつづけている。戦争が終つたという、シオニストのデマゴグを破壊する雄弁さは、闘いによって、今後も継承されるはずである。

② 帝国主義者に包摂されたマスコミユニケーションメディアに、全面的に依拠していること。(①の無知は、益々ブルジョアジーのニュースソースを、無自覚に信用するという結果を生む。)

これは外からの人民戦争の波を日本革命と相対化させる作業を、益々むずかしくメディアは、あたかも赤軍三戦士が軍事的未熟で「仲間のバクダンが誤つてあつた」とか、突然変異的に事件があつたかのような印象を与える為に、必死のマスコミ操作に奔走した。これはイスラエルシオニストが「いかに日本国民を我々の側に同情させるか」という観点から、殊に日本むけに操作したマスコミメディアの有効な得点といえる。

闘争直後の三十日(三十一日)のBBC英帝放送でさえ、二人の戦士が任務を遂行し、自爆したことを伝えたし(そのあとは、日々にユースがイスラエルによって操作されたが)三十日(三十一日)にレコーディングした、アルジェ、シリア、エジプト、リビアの支持声明、ファタ、PLO、アラブ連盟などの支持

月刊

映画批評

●10月特大号 4450円

編集 足立正生 相倉久人 佐々木守 平岡正明 松田政男

- プレヒト——非Aの報道者(ゲタール論補遺)……津村 香
- 都市は國家を超えうるか(ウエリニ論)……千坂恭二
- 天使はケチである(第一稿(若松孝二論))……足立正生
- シナリオ「祝祭」未発表……若松プロダクション
- しんどいしんどい大追跡(新ヒーロー論)……川本三郎
- テレビジョン(連載③)……佐々木守
- やくざ映画「長征」への出発(十年間の総括)……西脇英夫
- 「運動」の言語と「政治」の言語(批判者への応答)……菅 孝行
- 雉子も鳴かずば撃たれまい(大島渚批判)……竹中 芳
- 映画の秘やかな思ひつきへ(夏の妹「技術論」ノート)……原 正孝

編集室 東京都文京区本郷2-30-14
 映画批評編集室
 発行 東京都文京区本郷2-15-20
 新泉社
 振替番号=東京160936番

声明にいかにかこの闘争が、世界の波を作りあげたかが証明されている。(彼等の支持とヨーロッパ、アメリカ、ラテンアメリカからの都市ゲリラ派からの支持声明の質とは明確に違いがあるとしても)

空港襲撃は、高度な軍事戦略的な標的であり、そのことの意味を理解しえないならば、帝国主義戦争の論理、パールハーバー攻撃さえ理解しえないだろう。

この闘争を契機として、結果しつつある世界の革命派、ことに先進国のグループとの結合の深さは、日本国内における革命戦争派の闘争による立場の明確さと、相互媒介的に成長していくはずである。

③ 世界の抑圧された人民の側(民族ではない)の情念に立っていない日本の「革命派」の中の一国主義者は、プチブルロマン的、自己満足の革命であることを自己暴露している。

(抑圧された側に立っているという事実は、テルアビブ攻撃の雄弁さから、すべてを共有出来るはずである。六月十五日付、新左翼紙、富村順一氏の手紙が、一つのそれを表現している。)

このことはことに、日本革命戦争の現在

が赤軍森一派によって決定的に困難な段階にあり、このことと一重写的に、テルアビブ攻撃をも闇に葬り去ろうとする日本帝国主義者の意図はもろろん、その森一派の責任を痛感するあまりに、赤軍派内部にさえ若干みられる傾向であるが、軽井沢銃撃戦と同次元にテルアビブ襲撃をみようとする軍事力学的視点である。

我々の闘いは、その場所の抑圧された人民の意志を表現し、世界共産主義運動との連関の中で、共産主義政治を軍事的に表現する闘いでなければならぬ。テルアビブ攻撃はまさに抑圧された人民の意志であり、パレスチナ革命にふさわしい戦闘であったのだ。(日本の羽田空港を攻撃するのとはわけがらがうのである。)

そのことは、敵シオニストイスラエルがもつとも痛感したし、闘争の持続と、その波をおそれ、一ヶ月後の七月八日、シオニストの白色テロルは、PFLPの公然組織のリーダー、ガッサン・カナファニーを殺すという個人テロルによる反撃を開始し、連日ベイルート内で、そのテロルは、銀行、PLOリサーチセンター襲撃として、人民をおびやかしている。

しかし、敵がそうすればする程、抑圧された人民の血は闘いを要求し、ガッサン・カナファニーの葬式に、奥平、安田同志の写真をかかげたマーチは、六万人の、ユダヤ人を含むレバノンの闘う人民の武装デモとして、ベイルート市内を制圧し、アラブでもつとも日和見主義のレバノン政府に、強力なプレッシャーをかけると同時に、抑圧された人民の情念が一つであることを証明している。この情念に連鎖し、共に立つことこそ、日本革命派の、世界の人民との、帝国主義にむけた反撃の一步一步を証していくであろう。

我々アラブ赤軍は、日本の革命派が、世界的、地理的現実をふまえて、共に、更に大胆につきすすむことを、よびかけるものである。また、帝国主義者の手中にある岡本同志を支える運動を闘いとして、日本で表現することを、再びよびかける。

(これは、六月十五日に、日本の同志にあてたアラブ赤軍からの「テーゼ」の補足として書かれたものである。)

★三戦士追悼特集

8・16パレスチナ人民連帯日本二戦士追悼国際集会

三人の戦士が我々に言葉を残した。

「我々は戦争に赴く、絶対に葬列をくり出すな。ただ、祭りを我々と世界革命の友人たちの為に」

全共闘運動の中から、バルチザン軍団を先頭に旅立った戦士の群と赤軍派を頂点とした革命の軍事形成への長征の出発。これら革命戦争派の最も突出した質を断固として継承せんとする赤い血によって結ばれた義兄達の集い。8・16パレスチナ人民・インドシナ人民連帯日本二戦士追悼国際集会是京都大学法経一番の大教室を満場の熱気で埋めて開催された。

奥平・安田二戦士、そしてイスラエルの爆弾テロルに倒れた・PFLP中央委員・政治局広報担当員ガッサン・カナハーニを、そして既に戦い半ばに倒れた多くの日本の世界の革命戦士への黙悼、そして「同志は斃れぬ」の合唱。後につづく義兄弟達の決意と厳肅さに溢れた黙悼と合唱は入場の際

チェックされている報道関係者達にも自発的な起立を促す。

赤軍派代表を始めとして各戦線からの追悼演説は全て「今回の戦いは帝国主義とシオニズムに対する正当なる反撃」であり「これを断固として支持」し「この戦いの地平を引き継ぎ」更なる進撃を組織することを誓った連帯の表明であった。

相模原の米軍戦車輸送阻止闘争の現場から、岡本戦士の鹿兒島大の友人から、岡本救援にイスラエルに向い入国を阻止された弁護士から、警察・右翼暴力・手配師と熾烈な闘いを続ける釜ヶ崎の労働者から、そして多くの戦う現場からのアイサツが全て今回の戦いの地平と意義を一步も退くことなく賞揚し、そして各現場が更に進んだ地平に向って革命の地下水脈を掘り起し、やがて「巨大な奔流として湧き出んことをアピールする。

獄中から檜森孝雄、永山則夫、富村順一

各同志から追悼と連帯のメッセージ。そして遠くアルジェからアラブ赤軍代表のメッセージ、PFLP、PLO各代表部からの集会への国際アピール、来日し惜しくも集会前に日本を離れたパレスチナ解放戦士からのテープによる声のアピール、我々の戦列が地に降り、海を越えて拡がりつつあることの大デモンストレーションである。

戦士の実弟や両戦士とともに戦った友人の決意表明が「必ずや彼らに続く」ことを報告し、世界各戦線に向けて送られる英文の集会アピールが拍手で採択された。

集会終了八時五分前。実行委員長は「戦士の魂が今夜の大字によって送られるのではない。幻影を照らし出す大字とともにオリオンの三ツ星となって我々の戦いを見つめているだろう」と締めくくった。

(八・一六実行委N)

追

悼

八・一六集会実行委員会事務局
テルアビブ闘争支援委員会

オレたちの友人が死んだ。パレスチナ解放の烈火の中で、銃を手にしたまま。

奴らが驚愕したのは、奴らの反革命国際主義が想像できる「プロレタリア国際主義」を越えたところで起った事件だからだ。

奴らが恐怖したのは、三島由紀夫の消極的な死を、革命のための死がとびこえてしまったからだ。

奴らが、あわてて、イスラエル軍による絶対的な報道管制を敷き、無差別殺戮などというデマゴギーを世界中に流したのは、テルアビブ空港での英雄的な戦闘が、全世界の抑圧されたすべての人民のころろをつなく衝撃力をもっていったからだ。

日本のマスコミは、いつせいに「不可解」「狂気」と言ってわめきたてた、だが本当はわからないのではない、わかるのが恐ろしいだけなのだ。——日本の市民社会の平和となまぬるさの仮面をひきさいてしまつたら

だ、帝国主義とシオニストによって流されたパレスチナの民の血と奪われた財産と大地の怨念の深さが、パレスチナ人民のために平然と銃を握れる義勇軍戦士たちの大胆さが、そして銃撃にふさわしい砂漠を照りつける太陽の強烈さが。

オレたちのころろにとびこんできたのは、世界革命の雄大さだ。ベトナムで、そして北アイルランドで今日も続けられている戦闘、三里塚や釜ヶ崎の人々の苦しみと喜び、すでは、生と死の具体性によって、オレたちにとって想像することが可能だ。

オレたちは、人民のころろを知ることができるが、奴らは、人民に本質を知られないように逃げまわることしかできない。プエルトリコ人が交戦のまきぞえで死んだにしても、ユダヤ人がかつて迫害されてきたにしても、彼らを抑圧し迫害したのは奴らであり、ベトナムを焼土と化したニクソン

や、パレスチナ人を難民キャンプに追いやったダヤンこそがおとしまえてつけてもわばならぬのだ

オレたちは想像することができ
オレたちほどこへでも行くことができる
そしてオレたちは奴らに向けてブツぱな
すことができる。

オリオンの三ツ星よ、八・一六まつりの空に輝け！

オリオンの三ツ星よ、いつの日か、奴らに向けてブツぱなされる銃声が、オマエたちを追悼するのを聞くことがあるだろう。

★追悼集会へのメッセージ

パレスチナ解放機構

同志のみなさん、友人のみなさん、日本のパレスチナ人民支援センターの方々が、八月十六日京都において、テル・ア

ヴィウで戦死した故二同志のための追悼集会が開催されることを知らせてくれました。

私は、PLO（パレスチナ解放機構）を代表して、故二同志の死に深い哀悼の意を表明するとともに、集會参加者ならびにすべての日本人に対して、われわれが最終的な勝利の日まで日本人とともに闘い続けることを明らかにするものです。

三名の日本人同志たちによるシオニスト・イスラエルに対する革命的攻撃は、パレスチナ人民およびアラブ人民によって完全に支持されており、また両人民はアメリカ帝国主義、シオニスト・イスラエル、そしてアラブ反動勢力に対する闘争をいっそう鼓舞されています。三名の日本の同志たちは、アメリカ帝国主義とシオニスト・イスラエルがパレスチナ革命を絞殺しようと策動を強化している状況にもかかわらずパレ

スチナ人民の来るべき勝利への確信を強固にしたのです。

同志のみなさん、友人のみなさん、われわれの革命は、帝国主義、新旧の植民地主義および反動勢力に反対する世界革命総体の一部分です。パレスチナ人民は、アメリカ帝国主義と日本帝国主義に反対する日本人の闘争を全面的に支持しています。日本帝国主義は自衛隊増強を中止し、沖縄派兵をとり止めるべきです。このような日本の支配階級の態度は中国、朝鮮、ヴェトナム人民、そして世界の全ての革命勢力に敵対している、とわれわれは考えています。

親愛なる日本のみなさん、われわれが入手した情報によれば、シオニストはわが岡本公三同志に対し、パレスチナ人民に行なったのと同じ拷問と加えました。そして、軍事法廷は無期禁錮刑を宣告し、同時にシオニストたちは、パレスチナ人民迫害の事実を陰蔽しつつ、この判決

が「ユダヤ人の寛容」なるものを示している、と世界に宣伝しています。その一方で、シオニストたちは、故ガッサン・カナファア——二同志をはじめとしてパレスチナ革命の指導者なちをあらゆる手段を講じて暗殺しようとしているのです。現在のイスラエルのこうした策動に対して、PLO革命勢力は革命的報復を実現する用意のあることを明らかにしておきます。

最後に、パレスチナ革命とパレスチナ人民は日本人との連帯をいっそう促進することを希望しています。私は、日本の人民、ことに東京の支援センターの方々が継続的な物質援助を下さっていることに對し、心からの感謝の意を表明するとともに、支援運動の拡大を希望するものです。そしてまた、われわれは、世界革命と一致する日本人の闘争に対するわれわれの義務を遂行する用意があります。

どうか、われわれの友情を連帯の挨拶をお受け下さい。

故奥平・安田両同志哀悼！
パレスチナ革命万歳！
パレスチナの民主主義国家万歳！

日本人民とパレスチナ人民との連帯万歳！

PLO議長、常任司令委員会幹部

ヤセル・アラファト

★追悼集会への挨拶

パレスチナ解放人民戦線

親愛なる日本の同志のみなさん、

世界革命へのコミットメントの表現としてパレスチナ人民のために殉死した同志たち、すなわち奥平（バツサム）、安田（サラハ）を追悼する京都集会をあなた方がとり行なっているこの歴史的機会に際して、私は、PFLPの名において、あなた方に戦闘的な挨拶を送るものです。

親愛なる同志のみなさん

われわれは帝国主義・世界シオニズムやアラブ反動といった反動的・ファシシ的な付属物一切を伴うに對する闘争の単一性のみならず運命の統一性によつても相互に結びつけられています。この同志的な紐帯に加えて、一九七二年五月三十日のロッド空港における「ディア・ヤシン」作戦での奥平・安田同志の殉死とともに一層の強化がもたらされました。彼らの殉死は、プロ

レタリア国際主義の崇高な理想、つまり全世界で解放と社会主義をめざして闘っている革命家を結び付ける理想を強調し、強化するに至りました。

二名の殉死者の血は、人民武装闘争の道程を導き、世界革命の革命的分遣隊の統合を更に推進し、強化する方向にわれわれを導く烽火となるでしょう。

われわれは、あなたがたの光栄ある集会に参加できないことを極めて残念に思います。しかしながらわれわれは、このメッセージを通じて、日本の大衆および革命的勢力に對し、PFLPの全てのメンバーが二名の英雄的殉死者に對して抱いている深い愛情と尊敬の念を保証するものです。われわれは、これらの殉死した英雄を産み出した、また、彼らの殉死を追悼し、これら二戦士の、崇高な革命的動機にケチをつけようと

した帝国主義的・資本主義的・排外主義的プロバガンダを非難して立ち上がっている日本の大衆に對し大いなる賞讃の辞を呈するものです。

PFLPの内部においてわれわれは、わが戦士たちと日本の闘士とを結び付ける一連の殉死を誇りに思っています。われわれは、囚われの闘士、岡本同志を誇りに思っています。

これらの三名の同志および進歩的な日本の大衆に對するわれわれの態度を表明するのに、全世界のあらゆる革命勢力、とりわけ帝国主義とその反動的・ファシシ的従属物に對して大打撃を加えているインドシナの英雄的人民の前にわれわれの誓いを新たにすること以上によいものはありません。

抑圧された階級および人民の勝利が達成

され、そして人間による人間の収奪がこの世界から根絶されるまで、われわれはいかなる犠牲をも物ともせず闘争を推進することを明らかにします。

われわれはこの場を借りて、戦闘的な英雄たち——帝国主義的・資本主義的なデマゴギーに断乎として対抗している——が活動していた京都大学における革命的運動に敬意を表したい。京都大学の学生たちが帝国主義的・反動的・ブルジョア的プロバガンダを完全に拒否することの表現として奥

平・安田同志の写真を大学の門（時計塔）に高々と掲げたことを、われわれは常に想起こすでしょう。

親愛なる同志のみなさん、

われわれの共通した闘争の道程は、いかなる困難があろうとも、革命家たちの決意とともに進むことを確信していただきたい。われわれは、わが殉死者たちの血によつてこの道程の渴きをいやし続けるのです。先月のガッサン・カナファール同志、そしてガザにおける指導的同志の一人であったア

ーマド・オムラン同志の殉死はわれわれの闘いを続ける決意を示す例でしかないのです。

世界の革命勢力の間の同志的プロレタリア国際主義万歳、

抑圧された階級ならびに人民の闘争万歳、
インド・シナ人民の解放闘争に勝利を、
人類の敵に死を、
革命闘争の殉死者に栄光あれ。

★遠い戦場より

アラブ赤軍・重信房子

日本の同志、友人たち、

革命の松明が、この集会に結集したすべての同志、友人たちの炎となつて、燃えつづけているのを、遠い戦場から確信する時、私の革命の情熱は、更に赤く、更に深く、日本の同志たちと一体に燃え続けています。隊伍を整え、共に進もう。帝国主義者をこの炎の中にたたき込み、焼きつくし、我々の広野を打ち開こう。

パレスチナ革命に敵対する帝国主義者、

シオニストのテロルが、テルアビブ闘争後、PFLPの同志を殺害し、傷つけている。

我々は、帝国主義者に教えてやらなければならぬ。次は、お前たちの番だ。敵のテロルは、我々の隊伍を益々強化し、我々の革命を養っているだけだということを経験でも、武装闘争で答えてやる。革命闘争は、勝利まで決して消滅しないし、革命戦争は、世界の姿を一つにつなぐ唯一の術である。パレスチナの同志たちは、赤軍三戦

士の闘いの隊伍となつて深く、スクラムを組んで進撃している。

共通の敵に向かつて、我々が遠い戦場から進撃する時、革命の松明を高々とかけた日本の同志たちが、我々と同じ様に立ち、世界の戦場を一つに結ぶために進撃するのがみえる。我々の敵は一つだし、我々の味方は団結しつづける。

日本の同志たち、友人たちがそうである様に、我々も、困難を闘いのエネルギーと

化し、共に進むことをちかう。私はいつともここに居るし、あなたたちは、いつも私のとなり居る。私は革命戦争の一戦士であることの幸福と栄誉をはっきりと知ったし、次にむけて進んでいるはちきれそうな情熱をこの集會に結集したすべての同志た

ちにわかち合つてほしいと思う。三戦士の英雄的な闘いが、世界の味方をうち固めつつあり、三戦士の英雄的な闘いが、パレスチナフエダインの道しるべとなつて、赤々と燃えている。日本の同志たちに限りない求愛と、限りない挑戦を込めて、

旅立った三戦士の意志を深く継承し、共に歩き続けよう。日本の同志、友人たちよ！

八月十六日集會にむけて
遠い戦場より

★革命三戦士追悼にむけて

奥平純三

一九七二年五月三十一日は、我々にとつて忘れることのできない日となつた。三人の革命戦士は歴史を記す巨大な石版の上にギリギリと深い爪跡を刻み込み、革命と反革命の姿を明らかにすることによつて現代の本質を白日の下に晒し、既に開始されておりやがて全面的に本格化するであろう革命戦争を具現することによつて未来を象徴した。ここに我々は、はっきりと「我等の時代」を知るのである。

三人の「現代の英雄」達は、自ら意図した通りその行為を通して、世界が正に一元化しつつあるが故に空間的な普遍性を、そしてその未来との関係の故に時間的な普遍性を獲得した。その行為を通じて、過去幾

多の人間達が実際に流した、或いは流そうとして流しきれなかつた血と汗を、凝集し暴発させ飛躍させ、さらに計り知れぬ巨大なエネルギーを我々に還元したのである。我々は一時たりとも三人のことを頭の中にはつきりと据えておかずにはいられない。死んだ二人の流した血は、夏の赤々と燃えるアンタレスの光に更なる勢いを与え我々の情熱が冷めるのを許さないだろうし、その澄んだ思いは、凍てつくような冬のシリウスの透徹した青白い光となつて我々の意識のすみずみまで隅なく照らし出すだろう。彼等の生は永遠であり死も又永遠である。

後退することは断じて許されない！断固として現在の地平は維持しなければならぬ。我々は今まさに同質の為すべきことを十分に為しきれていないことを知り、大きな口をたたくのをやめじつと沈黙に耐えつつ力を充足しよう。常なる自己検証をもつて秋に備えよう。このことを以つて彼等の行為と死に報いることこそ最良の道だと信じる。

さあ、更に第二の封印を解き放ち、赤き馬と大いなる剣を持つ者を生み出だせ！

★現地からの連帯のあいさつ——日本PFLP医療委員会

日本の闘う兄弟達！
ロッド空港で命をかけて闘つた、世界の最も優秀な同志の闘いの勝利をたたえる集會に、ささやかな現地からの連帯のあいさつを送ります。

ここ、南レバノンで人民の医療にたずさわつて、はや一年が過ぎました。毎日のように、山と難民キャンプを往復するコマンド達にはげまされ、イスラエルの空から、山からの攻撃にも、いつも速攻の反撃と対応を準備している部落の人民にかこまれ、ロッド空港の闘いの勝利の喜びをわかち合えたことを、まず伝えたいと思います。

悪質な日本帝国主義者とジャーナリストは、三戦士の闘いに対して、無差別殺人という、まさに彼らの日毎行っている本質を、彼らの最もおそれる戦士達の代名詞としてでつち上げました。
帝国主義者と、彼らを恐れるプチブル反動政権は、みごとにその本質を現わし、イスラエルと和解し、平和共存しようとし、

言動を左右させています。エジプト政府の最近の政策は、ますますパレスチナの闘う人々と、エジプトをはじめとするアラブ諸国の人民の反撥を買っています。

ブルジョアジャーナリズムの目に見える地の根底で、畑仕事を共にしながら、巡回診療の中に全ての被抑圧者の流す汗と血の中で、人民の眞の革命は育っています。如何に世界を支配していると豪語するアメリカを先頭とした帝国主義者、サイオニストがテマを流そうと、祖国を追われた人民の血潮に流れるいかりは、世界の抑圧された人民の心を、その闘う肉体を結合し、日々巨大な飛行機と、戦車と無差別な人民殺害、子女虐殺の前に、着々と闘う陣型を整えています。

南レバノンの貧民達は、良く知っています。イスラエルに住むパレスチナ人と、国籍を持たない「ユダヤ」移民達は知っています。如何にサイオニストが人民を虐殺し、無

差別逮捕し、無差別攻撃しているのか、いったいイスラエルという国が、眞に認められるのかどうか。

戦後、ソ連、米国の国連政策の中で、闘う人民達を、新植民地主義で再編成していった世界の平和共存政策の、最も黒い地図は、今や赤い血で色どらています。
先日、レバノンの貧民が、コマンドを助けたといつて、レバノン政府に逮捕されて行きました。レバノンの貧民は、イスラエルの空襲とタンクで家を焼き打ちされ、なおレバノン政府にひっぱられていくのです。

彼らがパレスチナの闘う人民と結合しつつあることは明白です。
そして、全ての国で、帝国主義者と反動政権が、反革命の結合をすればする程、人民は、より固い絆を作つていっています。
日本の闘う兄弟達、はじめて日本で、パレスチナ革命に連帯する集會が持たれたことを、全てのPFLPの兄弟達と、レバノ

ンの人民に伝えたいと思えます。

三人の尊い革命的犠牲の精神は、我々日本人民の生んだ、偉大な革命戦士の魂です。パレスチナ人民のその闘いの中でも、一段と映えある栄光と賛美と教訓、はげましを与えた彼らの戦士としての全人格、全魂は、子供から老人までに、世界革命の生々しい現実を焼きつけました。

私達のささやかな部落の診療活動ですらも、この日本人戦士の闘いの精神の一部として受けられる栄光に輝いています。

世界の到るところで、どんなに小さな灯であろうとも、その燃えつつある革命の魂のひびきと共鳴する闘う戦士達は、明らかに既成の党の権威を必要とせず、自らの輪を広げ、闘いの輪を厚く、広く形成してい

くでしょう。

たとえ私達の活動が、小さな傷口や、つかれた人民の寄生虫病を治すという平和な仕事であるにせよ、日毎半市民、難民として生きている全てのパレスチナの人々、そして医者もなく、バスもない山村に生きるアラブの貧民達が、日本の戦士をたたえるのと同じように、私に感謝のことばと、そして「我々も日本に行つて闘う、世界のどこへでも、あなたといっしょに行こう」と真剣に語ってくれます。

国境を越えた意識は、ことばの壁をこえ、日毎の生活の中で、否応なしに共に泣き、共にいかり、十年の計をもった闘いに、小さな、けれども赤いほのおをともして行くことでしょうか。

★獄中から寄せられたメッセー

世界革命戦争万歳

松森孝雄

(警視庁在監)

世界革命戦争万歳

武装闘争は文字どおり現実である。

もつとも抑圧された人民の帝国主義者に対する復讐の闘いを組織せよ!

私は、バーラム・サラハ・オールド、そして岡本とともに歩む。

世界赤軍兵士 ユーセフ

三戦士バンザイ

富村順一

(東拘在監)

粗末なブロック家のコマンドの寢室の壁に、奥平、安田、岡本戦士の新聞切り抜き写真が、そしてガッサン、カナフアーニの顔写真が並べられたこのキャンプの朝は、文字通り、世界革命の核となる思想性を獲得した戦士達の無言の連帯のほほえみ、無心の子供の朝の握手で始まるようとしています。

我々の日本の闘いの質を継続させ、広げ、パレスチナ人民の闘いを強めて行くことの喜びを、三戦士の哀悼の言葉にして、今日の仕事に急ぎます。

ロッド空港闘争勝利万歳!!

世界革命戦士よ安らかにねむれ!!

一九七二年八月十日

本日テルアビブ空港決死隊、戦士の追悼集會が行なわれることを連絡受けまして、小生タワー事件被告沖繩出身、富村順一は、現在獄中であり、皆様と共に追悼集會に参加することが不可能にて、せめても、文面にて、追悼集會に参加したく、只今ペンを取っている次第です。

まず我々は、本日の追悼集會で、涙を流してはいけません。戦士した奥平君安田君、不当裁判を受けた岡本君に、よくぞ、三戦士が、パレスチナ人民の為に決死隊として、テルアビブ空港に参上して、イスラエル帝国主義に大々的な打撃をあたえ、日本出身革命兵士の革命精神を全世界人民に示したとバンザイをさげ日本日の集會が行なわれる事を小生は東京拘置所で期待する者です。三戦士の攻撃が如何に正当であり、我々も三戦士に学びパレスチナ人民はイスラエル帝国主義者に何をされたか。二百万パレスチナ難民と共に過去をふり返って、三戦士の行為に拍手を送るべきです。世界の帝国主義者どもは、自己の野心から今日まで多くの人民を殺害したことは、すでに歴史の示すところですから。故に我々の闘いは、基本的な生活権を守る闘争でもあり、同時に

帝国主義者への、報復でもあります。日本の司法権は岡本氏が帰国した時は、日本に裁判権があるとぬかして居るが、司法権は法の番人でなく、天皇を中心にした、日本帝国主義者の番人です。そのことを明確に示しているのが、今度の岡本裁判であります。小生は沖繩戦で多くの朝鮮人が赤ちゃ

んまで区別なく天皇の軍隊より惨殺されて居ることを存じて居ります。しかもその犯人どもが現在も四国でのう／＼と生活して居ります。そのような極悪人犯でも、天皇軍隊であった時は、職権を乱用して、犯人どもを知らぬふりしてきた今日の裁判官どもが、我々に法うんぬんする権利は全くありません。前後区別のつかぬ文になりましたが、本日の追悼集會は三戦士に拍手を送り、パレスチナ二百難民と共に我々もパレスチナ解放闘争の為に全ての人民と連帯し、戦う決意を確認して、三戦士の追悼会が行なわれることを心より期待いたします。

帝国主義者は自己の野心から、多くの人民を殺害して自己の野心を達成してきた。故に我々も人民解放の為に、帝国主義者に加担する連中を殺しても全く正当です。我々は、帝国主義者の息の根をとめること

勝利であります。三戦士にかぎらない、バンザイを送り、追悼集會の挨拶にかえます。追悼集會参加者へ

ゼンシンノホシ

永山則夫

(東拘在監)

ハルガトオクパレスチナノチニテエイユウテキゼンシラサレタオクダイラ、ヤスダリヨウシニマゴコロカラアイトウヲササゲマス

サンゼンシンノタタカイハイマヤセカイカクタイノゼンシンノホシトナツタコトヲツゲマス

ナガヤマノリオ

テル・アビブ上空一万フイート

ライラ・ハリド

この文章は、パレスチナ解放闘争の歴史の中で、シャディア・アブ・ガザレの指揮による「アラブパレスチナ解放・人民戦線」(乗取機のコールサイン・訳者註)の闘いとして知られているTWA八四〇便に関する報告である。ライラ・ハリドは一九七〇年九月十三日付の「サンデー・タイムズ紙」上でこの劇的な物語について語っている。

自分の故郷を、ハイジャックをしなければ、再び見ることができないなんて恐いことではないだろうか。でも、ハイファが、今そこに見えるのだ。パイロットの後に座り操縦室の窓から見ると、丁度頭越しに左後方に遠ざかって行く。ロッド空港に接近し一方二千フイートの高度へ降りて来ると占領されたパレスチナ、そこを「イスラエル」だと言う人もいるけれど、我が故郷の美しい海岸が見えて来た。

さわやかに晴れ上がった日だった。しかし我々はこの冒険の最も

めてからも食欲がなかった。お腹は空いていたのだけれど、コマンドの訓練や、子供の頃よく食べ物に不自由した経験で、空腹には慣れていた。

その朝、一九六七年八月二十九日、一寸買物をしなければならぬのでウィア・ヴェネトの洒落れた店へやって来た。大きなサングラスと、大きな皮のショルダーバッグと、一五、〇〇〇リラもしたつば広の帽子を買った。不愉快な程の無駄づかいになったけれど、これが普通のファーストクラスの旅客に見せるためのユニフォーム一式だった。

ホテルへ戻って着替えをした。衣服には別段関心が強いわけではなかったが、着陸した後で飛行機を爆破し、燃やしてしまうのも勿体ないので、スーツケースにつめるものだけ減らした。ハンドバッグに服を二枚つめ、二着のパンタロンスーツを重ねて着た下のはサイケデリックな花模様で、他人の借物だったので返したいと思っていたのだ。上に着たのはとてもスマートな白のコットンノースリーブだった。それにサンダルをはいた。

八四〇便は遅れていたもので、ラウンジで三十分程余分に待たなければならなかった。私は、チェ・ゲバラ、コマンド部隊のもう一人のメンバーの青年の目星を付けた。彼を、写真で見たことがあるだけで逢ったことはなかった。私達は確認のための秘密サインだけをしてお互いに知らぬふりをしていた。この飛行機に乗る前の余分な待ち時間は不安で、二つの出来事が私を狼狽させた。旅行に行くことではしやぎまわっているとても幸福そうな四人の幼い子供を連れれたアメリカ婦人に私は気づいた。もしも失敗したら彼らの身にどんな恐いことが起るかと思うと、衝撃を受けた。私は子供が好き

緊張すべき危険な局面に近づいている。美しい眺めを楽しんでいる暇はなかった。パイロットは今までのところ私の命令通りに働いてきてけれど、何とかしてロッド空港に着陸させようとするだろうか。イスラエルは、我々を強制着陸させようとするのではないだろうか。全ては二日前ローマから始まった。ヨーロッパへやって来たのは私には始めてのことだったが、ローマは素晴らしい街だった。すごく疲れていたの私はずっと、十時間ぐっすり眠った。飛行機に乗る前の日の夕方、ボルゲーゼ公園からトレビの泉まで街を散歩した。もちろん私は泉で伝統どおりにコインを投げた。再びローマへやって来れるように願いをこめて。でも、イタリア人は、今度来たときもローマを見せてくれるだろうか。泉の側の喫茶店に一人の女性歌手がいて、私は二時間程その歌を聞いていた。その日、他にやったことは、フランス製の香水を一瓶買ったのと、TWAの事務所まで翌日のアテネまでの切符の予約を確かめただけだった。その夜は夕食を食べる気がせず、眠りについたのは朝の三時だった。目が醒

だ。この飛行機には乗らないで」とその婦人に言おうかと思つた。けれども、我がパレスチナの物心もつかぬままに殺されていった子供達のことを思い出し、少しずつ力と勇気が湧いてきた。

二つ目の出来事は飛行機へ行くまでのバスの中のことであった。私の隣りに座った男が、「どこから来たのですか」と尋ねた。私はボリビアから来たという。彼はシカゴで十五年間暮してアテネへ帰るギリシヤ人だといった。未亡人になっている母親がアテネの空港まで迎えに来ているそうである。これも私にとっては衝撃だった。我々パレスチナ人は自分の故国を離れることがどんなに悲しいことかよく知っているし、私にも父と死別した母が家で待っているのだから一層よくその気持ちがわかるのだ。彼は話を続けていたけれど私は後にもう聞かないでいた。

私と仲間の青年は操縦室に一番近いファーストクラスに席をとった。ファーストクラスは五人しか乗客がいない、その上三人の客室乗務員が私達のまわりをうろつきまわって、私達にとっては全く迷惑なまわりであった。離陸してすぐに私達二人は扉に近い一番前の列に席を移した。

私達は二人とも昼食前の酒を断った。もともと私はいつも飲まないのだけれど、それに、膝の上にお盆をのせられては具合が悪いので昼食も断わった。けれどもスチュワーデスが大聲に喚き立てるので、目立たないように私はコーヒを注文し、友人はビールを頼んだ。彼は気分が悪いのだと思わせるために薬をもつてくるように頼んだ。

客室乗務員は簡単には立ち去ってくれなかった。昼食の代りに彼らは果物やケーキを積んだ大きなワゴンを運んで来て、しかも慌て

たことには、私達が勝手に取れるようにと、私達の前に止め、操縦室への扉を完全に塞いでしまった。ローマ・アテネ間の飛行時間は九〇分間なので、離陸後三〇分から一時間の間に飛行機を乗っ取るよう命ぜられていた。時間が迫っている。不審に思われるといけないので、ワゴンをどけてくれるように頼めない。一年も経ったかと思う程待つてようやくホステスはワゴンを運び去り、扉のすぐ右のソファアにいた乗客も立ち去った。

邪魔なものではなく誰一人驚かせることなく操縦室へ入れるようになった。びっくりした人が馬鹿げた行動に出るような事態は避けたいと思っていたのだ。

私はホステスに毛布をかけてくれるように頼んだ。友人はいぶかし気な顔付で、怖気づいたのではないかと心配しているらしかった。彼を安心させるために、化粧ケースを取り出して髪を整えて、落ち着いていることを見せた。そして時計を見て、私は五本指でサインを送った。五分以内に決行するという合図だ。合図をするのは私の役割だったのだ。

毛布の下で、このために私は毛布を頼んだのだ、ショルダーバッグからピストルを取り出し、ズボンの腰にはさみ、手榴弾の安全ピンを抜いた。

準備完了。丁度そのとき、一人のホステスがお盆を運んで入ってきた。彼女は肘でドアを押え外へ開いている。今がチャンスだ。友人はピストルと手榴弾とを手にホステスの前をすり抜けドアを入った。ホステスは武器を見て、「オー・ノー」と絶叫し、お盆を放り出した。今度の行動の中で、暴力的な出来事といえはこれくらいのものであった。

要求はなんだ。

ロッド空港へまっすぐ向って丁戴。

ロッド空港へ？我々はアテネへ飛んでいるんだぞ。

英語はお訳りになるでしょう。

私は副操縦士に突っぱねるようにそう言った。

私はパイロットのまうしろの二つの座席に坐った。手榴弾は着陸するまで、いつでも爆発するように左手に握っていた。友人の方は手榴弾をしまいこんでピストルを常に構えていた。私は無線用ヘッドフォーンを貸せと要求した。機長は狼狽して、私に帽子の上からそれをかぶせようとした。

帽子をとってくださらない？

リボンでくりつけてあったので、帽子を首の後ろに回せた。どうしても残しておきたい帽子だった。ローマ空港を呼び出したが、応答はなかった。

私は機関士の方に向きなおし、「何時間飛ぶ燃料がある？」と聞いた。私は燃料計を読み取って知っていたけれど、彼を試してみたのだ。案の定、彼は嘘をついた。

二時間だ。

嘘つけ。三時間半飛べるじゃないか。燃料計を見ろ。どうして嘘をつくんだ。今度嘘をついたら、ただじゃおかないよ。

どうしてそんなに怒るんですか。

私は嘘つきは嫌いなんだ。

そう答えたけれど私は、本当に怒ってはいなかった。命令を聞かせるため少し脅かそうとしただけだ。機関士はそれから一言も口をきかなかった。

私達は操縦室へ押し入り、友人が叫んだ。
動くな。さあ、新しい機長の命令に従ってもらおう。

機長は素早く無線で報告した。

武装した二人が入って来た。ハイジャックだ。

乗っ取りでの私の役割は、ピストルと手榴弾で威嚇し乗員の動きを制することだった。けれど、手榴弾を手にして立ち上がり、腰にはさんだピストルに手をかけようとしたとき、ピストルはズボンの中をすべり落ちて行ってしまった。一日中何も食べてなかったのが、苦笑してしまった。ピストルを振り回して敵を威嚇するどころか相手に背を向けてかがみこんで二本のズボンの上から武器よいずこ、と手さぐりをする始末である。機長は椅子をめぐらして新しい機長を見ようとしたけれど、これでは大きな白い女性用の帽子のテッペンが見えるだけだった。

意地悪なピストルを手に取り直して、ポケットにしまった。ピストルはもう使わなかった。余りハリウッドじみた脅しになるから。

私が操縦室へ入って「私が新しい機長だ」と名乗ったときの機長の驚いた表情といったら無かった。何と哀れにもこの男の目に映ったのはノースリーブの服にピラピラした帽子とサンダル姿の私なのだから。

私が新しい機長です。記念にこれを差し上げます。この手榴弾の安全ピンですの。

私はそういって、彼の鼻先にそれを差し出した。

これでいつでも爆発するわ、この手榴弾。命令に従わなければ、使いますよ。飛行機も、この中の人も全部吹っ飛ばすでしょうね。

時間はおよそ15時20分だった。

操縦室の中のダイヤルやスイッチの類には戸惑ったが、私達は十分に訓練され、計器の表示を熟知し、ボーイング707について完全な知識を持っていた。

乗員を機内に釘付けにして、次に機内放送で乗客にこう話しかけた。

皆さん。ベルトを締めて、お聞き下さい。私は新しい機長です。

パレスチナ解放人民戦線(P.F.L.P)チエ・ゲバラ・コマンド部隊は、このTWA機を乗っ取りました。全ての乗客に次の通達を固く守っていただくことを要求します。

1、席から離れず静かにして下さい。

2、あなたご自身の安全のために両手を首の後に回して下さい。

3、他の乗客の生命を危険にさらすことによるような動きをしないで下さい。

4、我々の行動の安全限度内で乗客諸氏の要求を考慮します。

皆さん、皆さんの中に多くのパレスチナ人や女や子供に死と悲惨な苦しみを与えた男がいます。私達は殺された人々に代って、この殺りく者をパレスチナの革命法廷に引きずり出すために、この乗取りを実行しました。他の乗客の方々は、英雄的パレスチナアラブ人民の名誉あるお客さまで、好意と友情によってなされます。宗教と国籍の如何を問わず、飛行機が無事着陸し次第、どこへでもお望みの所へ行く自由が保証されています。皆さん、私達の目的地は友好的な国で親切なる人民があなた方をお迎えいたします。ご協力ありがとうございます。それではよいご旅行を。

私達が追及していたのはラビン將軍(前のイスラエル参謀総長)で

彼がこの便を予約していることは分っていた。しかし出発直前に予定を変更したようだった。名の知れたイスラエル人にとって今日では、エル・アル航空以外の飛行機を利用する方がより安全だと考えているということはわかっていてた。

私達は全世界に声明を発表した。

PFLPのチェ・ゲバラ・コマンド部隊がTWA八四〇便のボーイング機を完全に支配し、ローマから占領下のパレスチナ・アラブ領内のロッド空港へ向っていることを通告する。この飛行機の指揮をとるシャディア・アブ・ガザレ隊長とその同僚は全ての関係者にこの機との通信においては次のコールサインを使用するよう要請する。——アラブ・パレスチナ解放人民戦線。このコールサインを使用しない通信には応答の必要を認めない。

シャディア・アブ・ガザレは私のコードネームである。本当のシャディアはPFLPの女性レジスタンス戦士で、一九六八年十月、二十一才のとき殺された。

この後私は機長に新しい航路地図を渡した。通常のアテネ・ニコシアを通るルートを使わず、ギリシヤの海岸沿いにまっすぐ南下しクレタ島のヘラクリオンの南東から、ロッド空港へ東進する。三三〇〇フィートの高度を殆んど海の上を飛んでいたので余り楽しい旅とは言えなかった。

新しいコースをとるとき、機長が南西に向って旋回しているのに気付いた。リビアのトリポリに近いアメリカの空軍基地へ行くこととしたらしい。けれども私は羅針盤を見ていたので、コースへ戻るように命令した。それからは、羅針盤に従って、どの方位へ向うべきか正確に機長に指示をした。

私は機内放送で乗客にも自然な調子で、私達の闘争について説明した。私達はイスラエルを練っている根源を断ち切るためこのハイジャックをしました。イスラエルに行かないで下さい。イスラエルでは国内でも、その途中でも抵抗運動が起っています。お友達にも伝えて下さい。私達は祖国へ帰りたい。ユダヤ人と一緒に暮らすこともできます。以前はそうしていたのですから。私達は乗務員にも説明しようとしたが、真面目に聞こうとしなかった。

16時19分 方位一一二度

カイロ空港とのアラビア語での交信は面白かった。突然女の声で、何事が起り、私達がどこへ向っているのかを伝えてきたのでカイロは面くらっているようだった。そして最初に我々独自のコールサインを使わなければ応答しないと云ったので、びっくりしたように途切れ／＼に、アラブ・パレスチナ解放人民戦線ですか、あああなたは、どこへ行くのですか、イスラエルへ。そしてイスラエルを解放します。

この後間もなく、ロッド空港に向って降り始めると事態は深刻になってきた。もちろん私達には着陸するつもりはないけれど、強制着陸させられるおそれは十分ある。しかし、私達は敵の上空を飛んで見つけたりはなかったのだ。

高度1・2・0へ降下。操縦士に命令した。副操縦士がからかうように、「一二、〇〇〇フィートのこと？」と口をはさんだので、わかっていてでしょう」と強い語調で言った。

私達はずつと降りて行き、もやの中からパレスチナの海岸が次第にくつきりと見えてきた。一万二千に降りたらどうしたらいいのだから、と操縦士が聞いた。二度旋回しましょう」と答えて、私は手榴弾を

十五分ほどして、友人が、乗客がまだ頭に手を回したままで、と教えてくれた。客室をのぞくとその通りだった。私は不自由な目にあわせたことを詫び、ホステスに食べ物、飲み物、お望みならシャンペンでも何でも欲しいものを出してくれよう頼んだ。それ以外は着陸まで乗客や客室乗務員とは私達は一切接触をもたなかった。

私達は一生懸命に三人の乗務員に友好的な言葉を使っていたけれど無駄だった。食べ物や飲み物をすすめたが断られた。タバコをすすめても断られた。彼らは何一つ質問もしなかった。時々、機長は振り返って私を見ては、不信に満ちたようすで頭をふった。唯一の人間的な接触は副操縦士が学校の生徒のように、トイレットに行っても良いかと尋ねたことだけだった。

操縦士は私の左手の手榴弾が気になるらしく、チラチラ見ていた。私は彼の背に手を回して手榴弾でトントンと肩を叩いてやり安んずき。私はこれを扱い慣れているかわからせるために、手榴弾で頭を掻いてみせた。だけどそれで彼が安心したかどうかは知らない。

15時55分 羅針盤方位一四〇度

この波乱の多い飛行の間で、穏やかな長い時間が、通過したイタリア、ギリシヤ、アラブ連合、レバノン、シリアの国々にメッセージを送るだけ中断されて過ぎて行つた。このメッセージで私達が何をしたいのかを説明し、パレスチナ人民の正当なる闘争を支持するようアピールし、次のような言葉でしめくくった。

アメリカ帝国主義とシオニズムを打倒せよ。我々は勝利する！副操縦士は私が「アメリカ」という度に怒ったように私をにらみつけた。

持った左手でぐるっと円を描いたので操縦士はビックリしながらそれを見ていた。自分の国の上空をビクニックしてみたいんでね」と私は言った。

言うまでもなく、ロッド空港との交信は友好的に、というわけには行かなかった。管制官は非常に興奮して怒鳴りつばなした。ロッド空港の波長に合わせて、まず初めに占領下の我がパレスチナ人民にアラビア語でメッセージを続み上げた。空港塔にアラビア語で呼びかけたが応答はなかった。「TWA八四〇ですか」と彼らは呼び続けた。うるさい！こちらはアラブ・パレスチナ解放人民戦線だ。このコールサインを使用しなければ応答しない。降りて行く。着陸する。場所を空けろ。

脅かすために私はこう言ったのだ。私達が着陸したくないと思っっている以上に彼らの方が着陸させたくないと思っっているらしい。上手くいっただ。ロッド空港塔は怒鳴り返した。降りて来るな。来るな。ミラージュで撃墜するぞ。こちらアラブ・パレスチナ解放。お前達に何ができる。私は生命は惜しくない。ここは我々の国だ。祖国の上空で死ぬれば本望だ。しかし乗員と乗客の生命の安全はお前達の責任だぞ。この間に高度は二万フィートまで降り、友人が機内放送のマイクを私の口元に近づけてくれたので、このやりとりを乗客も聞いていた。彼らにとっては余り気持ちの良い話ではなかっただろうけれど……)

地上からのミラージュによる脅しは続いていた。前方を見ると、ミラージュが飛んでいる。その中の二機はすぐ前にいた。降下を続けたが機長が、これ以上降りられない。前のミラージュが非常に危険だ。と私に言った。これはイスラエルが如何に私達の着陸を嫌が

っているかをはっきり示していた。副操縦士がロッド空港と話させてくれたくれ、と私に頼んだ。彼はロッド空港に事情を説明した。我々は彼女の命令に従って降りざるを得ない。そうしなければ飛行機は爆破されてしまう。ミラーージュをどけてくれ。そしてTWA八四〇と呼ぶのはやめてくれ。こちらは人民戦線だ。

多分この言葉が効いたのだろう、ミラーージュはまだ追って来たが少し遠ざかった。私達は高度一万二千フィートまで降りた。そしてロッド空港とテルアビブの上空を三回大きく旋回した。テルアビブ上空に七分間滞空し充分私達のデモンストレーションの目的を達した。私はロッド空港に最後のメッセージを送った。彼らが心配しつづけるように。一まずさようなら。又戻って来ますから。

17時12分 方位三五九度

私はパイロットに針路を真北にとるように指示した。彼は高度一万二千で燃料を使い過ぎたので上昇しなければ、と言った。私は二万五千まで高度をとれと命じた。

間もなく、ハイファが見えて来た。カメル山の連なり、その下に見える港、右手には石油タンクと白い煙のたち昇るセメント工場。これが私の街です。よく見てちょうだい。私が生れたところよ。私は乗員達に言った。私の家があったところは地図で大体見当がついていたので見つけようと思っただけだ。街はあまりにも早く過ぎ去って行ってしまった。操縦士にもう一度引き返して生れ故郷をよく見せて欲しいと頼もうかと思っただ。けれど、もう一分も無駄に出来ない程燃料が欠乏していた。

わずかに見えた風景と、子供の頃のおぼろげな思い出がパレスチナの我が家とともに記憶によみがえって来た。私は一九四四年四月

ないだろう。私達は自らの自由意志で離れたのではなく、シオニストによって計画的に無理矢理追い出され、帰りたいくても帰れないのだ。この祖国へ戻る決意が、世界の他の「難民」の中でパレスチナ人民をとりわけ特異なものにしている。

飛行機がイスラエルとレバノンの国境を通過したとき副操縦士は心配そうに「ベイルートへ行くのか」と聞いた。あなたの知ったことではない」と私は言った。しかし、燃料がないのは知ってるだろう。知っている。それに泳ぎ方も知っているよ。何が起きたって

私も、燃料の状況は心配していた。だがラス・ナクラの向うに広がる美しく青い湾を飛ぶことにもっと興奮していた。ラスの反対側には私達がパレスチナを離れてから住んでいるティレの街がある。私達のアパートは海岸沿いにあり、まるでつまみとれるように見える。母は自分の娘が頭上はるか飛んでいるとは思ってもよらないだろう。私はレバノンでの最後の夕方母の所へ行き、夕食には帰るからとまで言ってきたのだ。母が心配するのはわかっていて私が秘密にしておかなければならなかったのだ。何か起ったときのためにありきたりのお別れの手紙も置いてきていた。

水泳を習った海岸に波が打ち寄せるのが見える。私達はよくそこで時間を過ごした。映画館もなかったし、あつても金が多かった。右手の方に、この素晴らしい湾の先端に町のように見えるところがある。実は、パレスチナ難民九〇〇〇人のキャンプである。二十年間このようなキャンプが我がパレスチナ人民の新しい故郷になっていた。ティレに着いたとき私達は貧しくそして十年間ずつと貧乏だった。ハイファでは私の父は金持ちではなかったが、かなり裕福な暮らしをしていた。父は織物商人で、小さな喫茶店を持っていて、二軒

に生れ、一九四八年三月頃母が八人の子供とハイファを離れたときにはまだ四歳になってなかった。私は、ある日顔を血まみれにした男の人が階段のところに倒れていたのを覚えている。私の母は、その男は家の周りで起ったアラブとシオニストのハイファ争奪の闘いの犠牲者だと言っていた。私の父は、アラブの戦士達と出て行き、ずつと家に帰らなかつた。そして父が家に戻って来たのは私達が家を離れた一週間後だった。父が絶対に家を離れないから荷造りの必要はないといっていた荷物を母がまとめてしまっていた。市街戦は激化し、婦人や子供達は殆んどいなくなっていた。シオニストは進撃して来て拡声機で私達に立ち去るよう命じていた。後になって私達は母に、どうして家を離れたのかと聞いた。彼女は追いつかれたのだといつも答えた。

確かに近くの街角でしょつちゅう戦闘があり、母は八人の子供と一人きりで頑張っていた。彼女が最初に呼びにやったタクシーは銃撃され炎上した。二台目のタクシーに乗り込んだときすぐ近くで銃声があったのを覚えている。私達は慌てて立ちどまる暇もなく飛び出して、車が出る瞬間に、母は子供の数が一人足りないのに気づいた。それは私だった。私は階段の下にかくれていた。私は家を離れたくなかつたのだが母は、私が行きたがらないのは、お父さんの楽しい思い出が家に残っているからだ、といって私をからかった。母は念入りに戸締まりし大きな鍵の束を持って家を出た。

私達の家族がどのようにして「難民」になったか分ってもらえないだろう。しかしパレスチナ人民は本当は誰も「難民」ではない。我々は追われ、追いつかれた人民なのだ。もしも私達が難民で避難する場所を見つけたのなら、私達は、離れた土地へ戻りたいとは思わ

の店を貸していた。もちろんこれらは全部失ってしまい、しかしもつと困ったのは他の人達も同じだが、英国の銀行だったのに預けていたお金を一銭もおろせなくなつたことだった。シオニストがパレスチナを占領したときは大変な混乱が起り、父からの音信が何ヶ月も途絶え私達は、父が死んでしまったのだと諦めてしまった。父はエジプトで死んだ。こういうことはよくあることだった。私はこのように近隣のアラブ諸国へ散り／＼になつた多くの家族を知っている。私達が父に再会したとき、父は病身で、高血圧で心臓が悪かつた。しかし父が実際に思らつているのは、家と仕事を失くしたことだった。これもまたよくあることだった。父と同じ年代の人々で自分の仕事を失い健康まで損つた人を何人も知っている。多分父は闘い続けようとしたのだろう。多くのパレスチナ人は新しい生活の中で成功していった。そうしなければ「難民」が生き抜くことは出来ないのである。

父は一九六六年に死ぬまで五年間病床にいた。幸い母がティレの出身だったのでティレへ来た最初の一年は母の伯父の一人の家に住んだ。それから二間ある家に移り、そこで十六年間暮した。家族は十四人になっていて混雑なんというどころではなかつた。それでもなお、テントで生活している人よりましだった。冬の嵐の間中テントが吹き飛ばされて学校に來れない友達もあつた。洪水でキャンプが流され小さな弟がさらわれてしまった友人もいた。その頃のきまつた現金収入は唯一伯父さんが毎月出してくれる一〇〇レバノンポンド(三〇米ドル)で、とても十四人の世帯は養えなかつた。

私達は国連に難民として登録せざるを得なかつた。そして国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)から食糧支給を受けた。

しかしUNRWA自身が言っているように一日一、五〇〇カロリーの
かろうじて生存が可能という程度の配給だった。それでも飢えた人
間は耐えることを覚えるもので、むしろ耐えられないのは、心づけ
程度の食料をもらうのにカンや袋を持って列に並ぶ屈辱感である。
私達は乞食になってしまった。物乞い用のボウルを出すまったくの
乞食だ。その施しが個人からではなく国連から来るというだけの違
いである。UNRWAの給食配分の写真を見ても大人が列にほとん
ど並んでいないのがわかるでしょう。大人達は並ぶことがどうして
も耐えられないので子供を代りに並ばせているのです。うちもそう
でした。

一九五七年に姉達が学校の教師として働きはじめると、UNRWA
は配給を打ち切った。これは痛手だったけれど、配給の世話になる
よりはずっと気楽だった。UNRWAのパレスチナへの最大の功績
は教育を施したことだった。私は学校が好きだった。皆もそうだ
と思うが、学校では配給の列のように数量として扱われるのでなく
唯一一人間らしく扱われる場所だったからだ。私は最初ティレの英国
人学校へ行き、それからUNRWAの奨学金で隣町のシドンにある
アメリカ系のミッションスクールへ通った。

私はベイルートのアメリカ系大学へ行くための奨学金もって、
薬剤師になるつもりだった。この辺りでは女性としてはまあまあの
職業だった。けれども奨学金だけではベイルートでの生活を全部ま
かなうことはできないし、家から援助を頼むわけにも行かず、一年
間で大学をやめなければならなかった。これは私にとって大きな落
胆だった。私はクウェートで英語教師の職を六年間勤めた。教える
ことが特別好きだったわけではないが、家計を援けるためには働か

土が奪われ二十五万人のパレスチナ人民が新たに追放された。私は
そのとき始めて解放のためには積極的の何かをしなければと決心し
た。これはイスラエルがその軍事的勝利の代償として失った最大の
失敗であった。それはイスラエルに対する武装闘争に立ち上る新し
い世代を生み出したことだ。そして私はPFLPに加わった。去年
の夏私はPFLPでコマンドとしての十分な訓練を受け、その後こ
の任務に選ばれ訓練をうけたのだ。

17時28分 方位一一八度
イスラエルのミラーージュは私達がレバノンシリア国境を越える
までつきまともってきた。私は新ダマスカス空港塔にアラビア語で話
しかけ、着陸すると告げた。許可は要請しなかったが右側の滑走路
へ着陸してよいと言ってきた。しかし燃料が非常に少ないので一番
近い左側の滑走路へ着陸したいと伝えた。

機内放送で私は客室乗務員に、着陸次第乗客を非常口から避難さ
せるように命じた。すぐに機を爆破するからだ。機長には、空港ビル
に近づきすぎないように着地したらすぐエンジンのスイッチを切る

なければならなかった。兄の一人は技師の資格を取ってアラビア湾
のアブ・グビで働いていた。別の兄は商業経営を学んでやはりアブ
・グビの銀行で働いている。皆の働きで我が家の暮らしは又楽になっ
た。ようやく妹を大学に行かせる余裕ができたと思ったら、皮肉な
ことに彼女はフェダーイン（パレスチナ抵抗戦士）になることを望
んだ。兄の一人も私も専任のフェダーインだった。
レバノンの友人達は私の母に、今でもまだハイファに掃りたいの
ですか」とよく聞く。母の答えは、ええ明日にでも。苦勞をして、
今では楽になったわ。すてきなアパートに住んで、充分食べて行け
るし、子供達の教育資金も、テレビなんてぜいたく品もあるわ。そ
れに、私はティレで生れたレバノン人だし、よそ者じゃない、ここ
は私の国よ。でも故郷じゃない。故郷はハイファよ。
私は、自分が難民というものなんだということを六、七歳の頃に
なって知った。近所の子供と喧嘩したときにその子が、お前は難民
だ。生意気いいうな」と私に言った。どうしてもパレスチナ問題に目
ざめないではすまされないのだ。両親はハイファでの昔の生活を話
すし、友人達はキャンプで不自由な生活をしている。学校でもパレ
スチナのことを勉強する。十六歳の時まで私は、秘かに、アラブナ
シヨナリスト運動のメンバーになり、統一された社会主義アラブ世
界の中でのパレスチナの解放を信じていた。兄と姉は私より先に加
盟していて、私達は計画したり、夢想したり、論争したりした。私
はパレスチナの残された領土ウエストバンク地方に行き、祖国を知
るためにそこを旅した。

17時25分 方位〇七〇度
一九六七年の六月（六日戦争・記者註）にパレスチナの全ての領
域に言った。それは無理だ」と機長は言った。では私がやります
と言った私が、倒れて手榴弾が爆発するといけないのでブレイキを
ゆっくりかけるよう命じた。実際には機長は非常にうまい着陸をし
た。

17時35分 ダマスカス着陸
揺れが止ってすぐに私は客室をのぞき、すぐに脱出して下さい
と叫んだ。この瞬間、乗員はビックリして私達を飛び越して客室へ
駆けこんだ。彼らはワイシャツ姿だったので、友人は、上着を持
て行け」と叫んだ。けれども誰も振り向きもしない。私も叫んだ。
操縦ごころうさま。どういたしまして。副操縦士から返事があつ
た。二分後に機内は殆んど空になった。非常口から飛び降りようと
している四、五人に私は、ゆっくり、あわてずに」と言った。しか
し彼らは、私が誰で何と言ったのかわかりもしなかっただろう。

私は機内が空っぽであることを隔々まで調べた。友人は爆弾を操
縦室において飛び出して来て、私と並んで非常口のそばに立った。
私は二つの手榴弾をファーストクラスの客室に投げ込むが早いか避

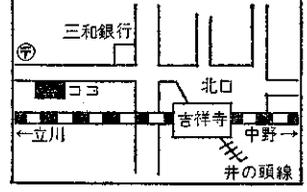
聴いてくれ子孫の同志諸君／このアンジェターのどな
り専門の男のこぼを／ボエジイの流礼の音を／生者対生
／ほくは跨ぐぞ／ちつぽけな抒情詩集どもを／きみらのコミュ
ニズムの彼方へ／だがエセーニンもどきの唄うたいの
へなちよこ武士とはちがうんだぞ／ほくの詩はとどくぞ
／世紀の山脈をこえて／詩人や政府の頭上をこえて

『マヤコフスキー選集』飯塚書店版より

特設コーナー 経済学野宇
OK 申込み持等パンフレット
機関誌

吉祥寺ウニタ書店

武蔵野市吉祥寺本町2-20-7
(0422) 22-9618



難用シュートにすべりこんだ。友人は恐ろしい勢いで私の頭の上に降りて来た。私は足が折れたんではないかと思つたが、すぐに立ち上がり二十米程走って爆発を待った。しかし何も起らなかった。中途半端に仕事を終らせるのはひどい苦痛だった。

友人は飛行機に駆け戻って爆弾を仕掛け直した。彼は非常に長身だったのでシュートからよじ登れた。私は彼のあとを追いかけて行った。機内での長い時間が経ち、彼は再びすべり降りて来て、私達はもう一度駆け出した。まだ爆発しない……。二分後に大音響とともに機首が吹っ飛んだ。友人は燃料タンクを炎上させようと翼に多くの銃弾を撃ちこんだが、空っぽに近かったので燃えなかった。

これで全てが終った。ありがとう、私は独りごとを言つた。誰も傷つけないですんだことでほつと安心し、非常にうれしかった。

空港ビルに向つて歩き始めると、バスが来て、乗客や私達をのせた。私達はシリア人が空港ビルをかたづけの間半時間程バスの中で待たされた。ギリシャ人のあの男を見つけて、私が友人とやったのよ」と言つと、彼は泣き出してしまい、私は彼を慰めるために、シリア人のその筋に頼んで、お母さんに心配しないように電報をうってあげると言つた。私達は乗客に煙草を勧め、子供にはお菓子をあげた。子供らは元気にそれを受けとつた。

待ち時間に、私は何故ハイジャックをしたか、もう少し乗客に説明した。

私達が犯罪者だとお考えになるかも知れません。しかしそれは違います。私達は解放のために戦つていのです。アメリカはイスラエルにフアントム戦闘機やナバーム弾を送り援助をしています。私達はアメリカ政府にも私達の抗議を思いしらせる必要があります。

私達は二十年前に故郷を追い出され、一九六七年にイスラエルは再び残った祖国を奪い私達を追い出しました。私達は自由を、祖国を家を取り戻すために戦つています。他の人にたとえ旅行者としてもイスラエルに行かないように伝えて下さい。私達はユダヤ人を敵視しているわけではありません。シオニズムと敵対しているのです。演説を終えると、カリフォルニアから来たという婦人が、英語を習つたのは「アメリカですか、イギリスですか」と聞いた。私の国です。シオニストが言っている程私達は無学ではないですよ」と私は答えた。

私はもう一度操縦士に会つて、うまく飛べたかどうか聞こうと思つた。パレスチナの話もしたかった。ヨルダンへ訪ずれてくれるよう招こうと思つた。けれど会えなかった。パーサーの一人に会えたけれど、彼は脱出の際一人の婦人がけがをしたといつた。私はお詫びを伝えて下さいと頼んだ。

私は別の抵抗運動の戦士と四ヶ月前に婚約していた。けれどいつになったら私達が結婚できるか誰にもわからない。

一つだけ、質問しても良いでしょうか。私は故郷を見るためにはまたもう一度ハイジャックをしなければならぬのでしょうか。

(原題UP,UP & AWAY,Information)
Department, BEIRUT, 1971

訳・三村 訓

★三戦士追悼特集

PFLPとテル・アヴィヴ空港闘争

アル・ハダフ紙一九七二・六・二三日号

敵の砦の真只中での勇敢な行動の政治的背景と戦闘的意義

パレスチナ解放人民戦線は、テル・アヴィヴ空港でディア・ヤシ村民虐殺行為に対する報復をなした後で次のような声明を出した。パレスチナ解放人民戦線(PFLP)は、占領された我々の領土にあるテル・アヴィヴ空港において今日、夕刻、殉教者のグループが行なつた勇敢な突撃行動に対して、完全な責任を負うことを宣言する。この行動は六月の敗北の五周年記念としてなされた。そして、我々、人民大衆と世界の革命勢力の前に、この勇敢な行動が確認する諸原理を提示する。

まず第一に、敵の追撃と攻撃がどこにおいてなされようとも、反動的・帝国主義的・シオニズムという敵との闘争における我々の対決の中で、それは基本的な重要性として残るであろう。今日、我々

の勇士たちが遂行した行動の如きは、前線の強化のため、シオニズムという敵の生存手段の補給の動脈を断つたものである。それ故に、このような行動は、我々の占領された領土におけるシオニズム・植民地主義の存在との闘いの行動方法として正当性をもっているのである。

第二に、アラブ祖国解放運動の勢力に直面して、帝国主義の攻撃は我々の領土においてその地位を強化しようとしており、シオニズム・帝国主義の支配により広汎な反動を行なおうと努力している。

この帝国主義の攻撃は、一九七〇年九月以来、野蛮な悪意の烙印を押されている。これは、ヨルダンにかける抵抗に対する弾圧の中に示されている。また、他の多くのアラブの地における抑圧にもみられる。……(中略)……

第三に、帝国主義の攻撃とそれがもたらす結果から、パレスチナ抵抗運動を含む愛国的アチールジョワジの組織の若干の努力が行なわれた。そして、この野望を挫き、その存続を不可能にした。

さらに、この組織がもし望む場合には、自由に行ないうるようなはっきりした目的を保証し、必要な時にはそれをおしとどめることとこの組織のそれに対する便宜とを保証した。

(中略)

第四に、帝国主義の攻撃と同じく、ヨルダンの反動権力が行なっている狂気の活動は、その存続をはかろうとする政治的解決を上首尾に遂行することはないだろう。「アラブ連合王国」のもくろみ、この破廉恥な企ては、パレスチナ人民に対する代理人としての自己を強化しようとするこの手代の組織による自暴自棄の努力なしには行なわれなかつたものである。しかし、我々パレスチナ人民は、このような努力がどのようになされようとも、目的を完遂する。このような努力は、イスラエル側に結びついたものであれ、ヨルダンの反動的組織に結びついたものであれ、不毛な努力であり、パレスチナ人民の願望に由来するものではないし、パレスチナ武装抵抗運動のようにその正当な代理人と見なされるべきではない。

六月の敗北の第五回記念として

第五に、我々アラブ民族に対するシオニズム・帝国主義の敵対行動の第五回目の記念、これは、革命的大衆との約束を確認するためには、革命家たちにとっては好都合なことである。たとえ我々の手がどこまで続くことも、我々、抬頭しつつあるアラブ民族と殉教者たちの魂は犠牲の火の尊きことにおいて結びつく。我々は、我々の勇士の血とどのような困難の前においても不撓不屈であるという決意とによってこの約束を果たすのである。敗北五周年記念は、我々の占領された領土の中央にある敵の誓の真只中においても、最も

ない地域においてはどこでも敵に打撃を与えよう、という決意の前には障害となりえない。

③我々、パレスチナ人の現実をあたかも革命の観点からはもう終りをとげたかのように描き、解決の企みを遂行しようとする用意を描き、我々大衆に武装抵抗は失敗したと示唆し、占領状態が繁栄と歓迎と平和のうちにあるかのごとく描こうとするシオニズムと帝国主義と反動勢力の攻撃、これらは全て、長くは続かない嘘以外の何物でもない。

ゲリラ虐殺にこたえて

第八に、今日、行なわれた突撃行動は、モシエ・ダヤーンとその手下どもが、冷血に勇敢なゲリラに対して行なつた虐殺に対して、革命的にこたえたものである。この虐殺は、イスラエル人たちが彼らを殺すことによつてパレスチナの革命的行動に打撃を与え、見せしめとするように行なつたものである。ダヤーンの行なつたこの虐殺に対する我々の革命的な応答はさもない偽瞞の結果として流された勇敢な血を伴つた。また、この応答は、パレスチナ人の革命的行動が新たな革命的行動の爆発にしか導かないことを占領者たちに示し、戦士たちの死が新たな戦士たちの出現にしか導かないこと、シオニストの虐殺者、ダヤーンの流した勇士の血が大衆の河の中に流れこみ、いかなる生活の敵に対しても勝利するまで奔流のように流れるであろうこと、を示したのである。

この行動の人道主義的側面

第九に、今後、この行動を人道主義的観点から語り、無実の人が

峻敵に以下のことを知らせるために、革命家たちにとっては絶好の機会である。すなわち、六月五日の戦争はまだ終わっていないのであり、帝国主義とシオニズム、反動勢力の抑圧下にある大衆が新しく蘇生し、奪取された我々の祖国に向かって進撃し、敵を撃破するであろう。また、祖国の貧民、難民・世界における革命・解放勢力は勝利に向かって前進し、我々の祖国の上に横たわる敵の棺架に新しい釘を打ち込むであろう。

第六に、我々の勇敢な戦士が敵の誓の真只中で行なつた偉大な行動によつて、彼らは、歴史的な突撃を行ない、勝利の決意によつて不撓不屈であるという信仰をもつ革命的戦士に対する模範として世界の先頭に立っている。この行動は、この勝利への道において、戦闘方法としてすぐれたものであり、また、その生は大衆の奔流の中の一点としてしか存在しえないという深い信仰の故に、持つべき最高のものである。この勇敢な行動は、我々パレスチナ大衆の進路が立ち止まることなく、世界の革命勢力との組織的同盟にある、ということをはっきり改めて証明したものである。

(中略)

第七に、我々の勇士たちが行なつた勇敢な突撃行動は、我々の戦闘の歴史の決定的時点において、最も高度の勇氣と犠牲心とを確認した。

①我々が直面している解決のいかなるたくらみも、我々大衆の闘争続行の決意と我々の目的遂行の過程における最高度の犠牲の前には障害となりえない。

②包圍と封鎖と飢餓をもたらそうとするいかなる努力も、我々の革命へと前進し、この敗北の想い出をすぐには拭い去ることのでき

殺され、危険にさらされたこと等々を述べたてて利用しようとする多くの企てがなされることであろう。この点に関して我々にとって重要なのは、それが不可避免的に総員に対するものになるということであり、彼らの頂点にはシオニストの虐殺者たちがいることを想起することである。同様に、学校の子供たちに対して、またエジプトの工場労働者に対して、ヨルダンの人々に対して、またレバノン南部の村の人々に対して行なわれた虐殺を銘記し、この虐殺をもう昔のことである、と考えない限り、すぎ去るものではないことを銘記しなくてはならない。我々の頭上に剣をふるうことのできない無実の人々という主役は、我々に対して向けられただけのことである。テル・アヴィヴ空港への旅行者は我々の見解によれば無実の人々ではない。彼らが旅行地として我々の占領された領土を選んだということ自体、敵に対する加担になるからである。我々は、彼らがいかなる形をとろうとも無実の人々とは見做さないのである。パレスチナ解放人民戦線は、一九六九年九月に発表された宣言の中で、占領されたパレスチナに行かないよう旅行者に対し警告を行なつた。解放戦線は、いかなる人であれ、この宣言の内容を知らない、ということに対しては責任を負わない。

戦士たちは外部より戦う

おお、戦う我らの人民大衆よ

おお、我らアラブ民族の貧しき子らよ

おお、世界の革命勢力よ

我々の勇士たちは、諸君の革命的的精神の中で、どこにおいても、いつまでも生き続けるであろうし、彼らを継承するところではどこ

でも生き続けるであらう。

この勇敢な行動における世界革命の戦士たちの連帯が新たに確認された。ちょうど、殉教者によって世界的基盤の上における革命諸勢力の間のゆらぐことのない組織的共闘と同盟という性格が確認されたかのようである。この連帯は、世界の革命勢力のみが、連合し、擄取し、至るところで貧しい諸民族を圧迫している敵の兵官と対決していることを立証した。また、これらの敵に対して革命勢力を孤立化させるような時は過ぎ去ったこと、諸民族のプロレタリア的連帯の旗がパレスチナにおいてもヴェトナムや世界各地と同様に高くひるがえっていることを示したのである。

ディア・ヤシン村虐殺に対する報復行為を行なった殉教者のグループの勇士たちは、数千マイルの彼方より、シオニズムと帝国主義諸勢力に対する戦いにおいてパレスチナ人民と連帯するためにやってきた。そして、人々の魂をこの勇敢な行動によってパレスチナの地に導き、革命的諸民族のプロレタリア的連帯の基礎をきつき、世界に対して、パレスチナ問題はパレスチナ人民だけの問題ではなく、それは現代における抑圧され、擄取されている人々の問題であることを立証したのである。パレスチナ人民は尊敬と誇りと賞讃の目でこの三人の勇士を見るであらうし、パレスチナ解放のためにその魂を犠牲として捧げたパレスチナのいかなる戦士にもまして、これらの人々に注意を払うことであらう。

パレスチナ解放人民戦線は、我々の闘いに連帯してきた革命勢力に対して、その革命家たちの血がパレスチナの革命家たちの血と、どこよりも強くパレスチナの地においてこそ混じり合うことを確認してきたのであるが、我々パレスチナ人民の闘いが見出した連帯を

なわち、前期間にわたる革命的戦闘の道は、パレスチナ解放と統一された民主的社会的建設のための闘いをめざす我々人民大衆の道である、という確信である。大衆の潜在力を最高度に、闘いの長い年月にわたってひき出すことのできる革命組織の指導の下にある大衆の闘いは勝利を実現せずにはいない。今日における歴史的勝利を記している勇敢なヴェトナム人民の闘いの如きは、抑圧され、植民地化され、擄取されている諸人民の教訓なしにはありえないのである。パレスチナ解放人民戦線は連合した帝国主義という敵に対して勇敢な闘いを行なっているヴェトナムの革命家たちを生気づけ、彼らに祖国の解放と外国の帝国主義を駆逐し、国土を統一できるように、その成功と進展とをきわめて強く望むものである。これらの諸目的について、我々は、その実現は我が人民や他の諸人民の闘い、資本主義世界における革命勢力の闘いに対して大きな便宜をもたらすものである、と信ずるのである。

アジア諸民族の連帯と闘いの旗は高くひるがえっている。我々の目の前で、殉教者たちの血が輝いているし、どこまでも続く闘いの道を照らす光が目の前にある。

もう一つの四項目声明

この後、人民戦線はもう一つの声明を出し、次のように述べた。
テル・アヴィヴ空港で昨日の夕方、我々の革命家たちが突撃行動を行ない、多くの敵を倒し、殺し、負傷させ、二名の同志が死に、三人目は捕えられたのであるが、この勇敢な突撃行動の二十四時間後にはパレスチナ解放人民戦線は次のような諸点を声明した。

こんにち、はっきりと示した。また、このインターナショナルな先駆的行動によって、この革命勢力に対して深い尊敬の念を示したのである。この行動と被占領地におけるわれわれの革命家との共闘のみが、シオニズムという敵を打破する戦略を内部において強化し、敵に打撃を与えることの困難さを減らすことのできる所ではどこでも、外部においても同様である。敵の心臓部をめざす今日の行動は、人種的な植民地主義の偽瞞を打破すること以外にはありえないし、この突撃的行動を行なった戦士たちとパレスチナの地で勇敢な行動を行なった同志との共闘は、敵とシオニストにその堅固な要塞も、我々の愛するパレスチナの地にいる虐殺者たち——後らの頂点には虐殺者たちの長たるモシエ・ダヤンがいるのであるが——我々の勇敢な革命家たちのライフルより離れているのではないことを覚え、テル・アヴィヴ空港における殉教者たちは、敵と襲奪者に打撃を与えるための卓越した指導者として我々と全革命勢力を駆り立てる以外の何物でもないことを覚らせるのである。

行く手はどこまでも続く

おお、我々パレスチナ人民大衆よ

おお、全ての地における革命勢力よ

パレスチナ解放人民戦線は、その誓いがいつまでも完全であるように不滅である。この革命的組織は休戦することもないし、小細工をすることもないし、勝利の完遂に対する全ての信仰をもって、闘いの道を進むものである。そして、それを妨げるいかなる困難をものともしないし、その名声と戦争行為の遂行に対するさもししい企ての徴候をもものともしないので、次のような確信を持つのである。す

途上における革命的烽火

①パレスチナ解放人民戦線は、二人の勇士が類い稀な勇氣と深い信仰とをもってその任務を完全に果たして倒れたこと、および以下のことを宣言する。すなわち、どこにおいても帝国主義に対する全世界の大衆の闘いのインターナショナルな連帯のはじまりにおいて、またこれに類する徴候のある全ての所でも不撓不屈であり、時と場の好都合である所においても敵を攻撃することを、人民戦線は全世界に対して、インターナショナルな闘いの連帯が人民戦線の理解する意味において、またその実践において、シオニズム、すなわち帝国主義的世界的拮据りに依存し、諸民族の血を吸うことによつて生きている反動的な運動に対する闘いにおける力強い基礎を形成することを、誇りをもって明らかにする。

勇敢な日本人ゲリラたちは、解放された人間の未来に対する忠誠を求めた道を歩んだ。そして、労働者階級とその前衛の運動に対する運動の中で、最も深くその責務を果たし、帝国主義とシオニズムの墓穴をともし掘り、世界における高邁な戦士たちのスローガンを達成し、パレスチナ革命の一員となったのである。これらのゲリラたちは、パレスチナ大衆の闘争の過程で、新しい戦士の一団をみちびく烽火となるであらう。これは決して消えることのない烽火である。

非軍人と軍人

②日本の三人の同志たちは、この作戦の中では、重要であると考えられたこの作戦の諸部分を分担して行なった大きなグループの一

トップニュースは、パレスチナの遊撃隊員がHASSBIYA（南レバノンにある町で、イスラム教徒でもなく、キリスト教徒でもない、ズルーズという身分の種族で、レバノンの要人の一選挙区であり、遊撃隊に好意的でない）の二姉妹を誘拐したとの事で、姉妹の親兄弟が二姉妹をみつげしだし殺す、同時にパレスチナの隊長ヤセル・アラファトも、この遊撃隊員を公開・銃殺すると発表。なぜ兄が妹を殺すか理解してもらったため、アラブの婚姻制度の封建制を説明しなければならぬ。アラブでは嫁入り前の女は、処女でなければならぬ。男は結婚する前、みのしろ金（結納金）を相手の父母に渡さねばならない。その女が美しければ、いい家から高いみのしろ金が入るので、貧しい家庭にとっては、美しい女は宝だ。だから売り値がつくまでは、他の男にさわらせないように大切にしておく。今でも、私の友人で好きな人がいるのに親が許さないで泣き泣きあきらめた人や、みのしろ金がないので、なかなか結婚できない中年の男が居る。

こうしたことと体面上のことがあるのか、もし不義をはたらいたら、親か兄弟が殺し

を維持することのみ願っているのだ。

パレスチナ革命が、シオニズム・イスラエルだけでなく、アラブレバノン政府の圧力を受けていた。丁度この声明の三日後、七月八日、このベイルートで反革命のテロがおきた。午前十時頃、日本の三人の英雄のスポーツスマンの役割を果たしていたパレスチナ解放人民戦線（PFLP）中央委員であり、PFLP機関紙「アル・ハダフ」の編集長の戦士ガツサン・カナフアニが反革命のテロで殺された。自宅前の車で、スイッチを入れたとたん爆発、同乗のメイも殺された。TNT五キロが夜のうちに車にしかけられていたのだ。車とともに彼の身体も木っぴみじんに吹きとび、顔と胴、手足、肉片が五〇m先までとび飛んだ。ピニール袋にかき集められた指導者の肉片、カツとみひらいた目は忘れることはできない。残忍な反革命のテロだ。

レバノンの新聞によると車の近くにイスラエル製の燭台が置いてあったと写真も写っているが、偽装のようだ。パレスチナに好意的でないアラブ内の反革命テロだという人やらで臆測されているが、しかし、偽装だからこそ、アメリカ帝国主義の手足であ

てもいいとなっている。若いある女性など「これがアラブのシステムよ」と言っていた。これが現実にあったのだ。このハスバイヤーの二人の姉妹は夕方家に帰ったところ、その場で兄に射殺された。兄はつかまつたが、五年の刑、そして二姉妹をカイボウしたら処女であった。（以上が新聞のニュース）

真相は車を走らせていた遊撃隊員が偶然に道であった二姉妹をのせ、ドライブをしたとの事だ。なんとも悲喜劇で話にもならない。

しかし、これをきっかけにハスバイヤー地区で、山岳にいるパレスチナ遊撃隊の追い出し大デモンストレーションが起きた。その直後（三日して）、六月二十一日、シオニズム・イスラエルはこのハスバイヤー地区を、家屋をふくめ、空陸から集中攻撃を開始した。遊撃隊員は十数名死んだ。そしてこれは、この地区からのパレスチナ遊撃隊追い出しに拍車をかけた。レバノン人とパレスチナ人民の対立を利用し、その弱さに攻撃をしかけてきたのだ。

根拠地のない不幸なパレスチナ遊撃隊は後退せざるを得ない。またこの日の攻撃で

り、おそるべき陰謀組織CIAと手を組んだシオニズム・イスラエルのテロといわねばならない。この日同時に、GPFLLP系のパレスチナ革命組織の事務所も爆破され、一人の指導者が負傷した。シオニズム・イスラエルのこの残忍な報復の手口はパレスチナ人民だけでなく、すべてのアラブ人民の怒りを買っている。

翌々朝、サブライキヤンプから出発して午後四時、パレスチナ人民葬が行われた。迷彩色のコマンド服を着たパレスチナ遊撃隊の音楽隊十数名が前列に整列、次に武装した遊撃隊に守られた戦士ガツサン・カナフアニの遺体をのせた車が、花輪にうもれた彼の写真、そしてスクラムを組んだ人々の隊列がつづく。先頭に黒い服の戦士の妻と、胸をはって前方をみすえて行進する遺児、少年の姿がみえる。負傷した戦士はピッコをひききき参加、パレスチナ人民、レバノン人民の結集は四万をこえたといわれている。各隊列ごとに、シユプレヒコールや戦いの歌が合唱される。音頭をとる者は、かたぐるまの上にのり、手をたたいたり、ハンカチをうちふる。このリズムカルな戦士をたたえる歌や、手拍子は感傷とはほど遠

もつとも犯罪的なのは、日本人の医師や看護婦が月赤十字病院で働いているとシオニズム・イスラエル内で報道されたため、ハスバイヤーにあった月赤十字病院の小さな診療所が攻撃され、全滅した。一年以上も私と一緒に働いた二十二才の看護婦は頭部をふきとばされ、死体となって運ばれてきた。同時にコックさんも死んだ。私の身がわりだ、責任は大きい。関係ない人を殺して、人道主義をふりまわしているシオニズム・イスラエルが、国際赤十字と締結している月赤十字病院を襲うなどと、いかに彼らの言う人道主義がまやかしてあるか！そして、この経験から、やつらはレバノンの情報に速く、地形や目標を正確に把握していることだ。この後、十四日ぐらい、七月五、六日前後、レバノン政府が声明を出す。

「パレスチナコマンドは、レバノン領からイスラエルに攻撃にでてはならない。前線にはレバノン軍を配置し、パレスチナコマンドは後衛に位置するよう。」レバノン政府は、シオニズム・イスラエルの攻撃におびえきつてしまい、なぜなら観光でなりたっているこの国にとっては、戦争は死活問題なのだ、と同時に、今のブルジョワ権力

く、生気がほとばしっている。まさに、革命の際、パレスチナの祭の日だ。道路いっぱいの大デモンストレーションになった。

その横を武装し、銃をかまえた遊撃隊のつた車が通りすぎる。約二時間もの長い隊列は他の戦士がねむっているそばに着く。松林の間にうめられる柩に、花ビラが雨のようになげられる。肩ぐるまされた戦士の子少年が勝利のサインをする。それに答えていっせいに勝利のサインと力強い「こぶし」が上がる。その時、クレシンコーフが空に向けてグッダグッダ……と発射された。九月の黒い手の同志たちの決意から、革命万才！

全での誠実な革命家万才！
勝利まで革命を堅持しよう！
勝利か死か、前進あるのみ

パレスチナの戦列から

一九七二年七月十二日深夜

★三戦士追悼特集

世界共産党 世界赤軍を組織せよ、
組織せよ、組織せよ！

上野 勝輝

一 はじめに

同志岡本公三達、世界赤軍兵士のイスラエルへの革命戦争行動があつて以後、国際反革命と世界の革命武装勢力の対決は一層深まつた。行動上の全責任はPFLPが、スポークスマンを通じて声明として明らかにしている。政治上の立場をはっきりと示すこと、それは世界の革命武装勢力へかけられている国際反革命に反撃する上で極めて重要なことである。それ故、敵をバクロシ、味方の革命勢力成長強化への教訓を、述べたい。

二 「人命尊重」は、ブルジョアジーの本心ではなく、革命勢力非難の口実にすぎない。

ブルジョアジーは、「無差別テロ」「非人道」などと、あたかも自分達は「人命尊重」主義者であるかの如くふるまっている。日本政府はそれを示すためにイスラエルにお詫びし、見舞金を送ると言

勢力非難の口実としてわめきちらし、革命の大義を抹殺せんとする。宣伝のために使っているにすぎない事を示しているのである。

我々は、このような反革命的宣伝の敵の本心を徹底してバクロシ、超階級的価値感の「人命」に対して、あるのは、ブルジョア階級の命か、プロレタリア階級の命か、その他の階級の命か、と、もつと具体的なものである事を明らかにし、プロレタリア階級の革命の正義・大義を鮮明にし抜かなければならない。

三 日本政府とシオニスト国家・イスラエルとの結合 国際反革命をとことんバクロする

日本政府は、米軍のベトナム反革命戦争に公然とくみして人殺しをバンバンやっているのに、お詫びのお字も出さないのに、なぜイスラエルに対しては、日本政府の行動、または政府の承認下の行動でさえない事件に対して、日本人としてお詫びするのであるのか？

それは、人命を尊重しているからでは決してなく、中東の石油利権を守り、この利権をおびやかす、独占を没収する社会主義革命がこの地域で起らないようにするために革命ゲリラ人民を何千人何万人と殺している（一九七〇年九月事件の時、イスラエルは何万人ものゲリラ、市民を殺した）イスラエル国家を守り、国際反革命の利益を守るためである。それゆえに、アラブ・パレスチナ革命勢力が、日本政府の言動いかんによつては、日本に対してどんなことになるかわからないぞ、と警告しているのは全く当然であり、国際反革命行動としての日本政府の行動に対しては、我々もアラブ・パレスチナ人民と共に断乎として反対し対決し粉砕しなければならぬ。

四 第二次大戦後世界を世界革命戦争で転覆せよ！

反革命シオニストユダヤ人ブルジョア民族国家イスラエルは、第

つている。日本政府は、こういった、「お詫び」の立場を、ベトナム戦争に対して示した事が一回でもあるだろうか？「人命尊重」「人命尊重」とわめいている諸君が、ベトナム戦争で、今日も日本のナバーム弾で、日本の基地、グアム、タイなどの基地から連日米軍が飛び立ってベトナムの人民を殺している事に対して、これほどわめいた事があるだろうか？ ない！ そんな事があったためしがない！ では、彼らは、本心からの「人命尊重」主義者ではないという事になる。そのとおり。彼らブルジョアジーは、人命などどうも思つてはいないのだ。自分の階級利益のためにやる戦争で何百万人何千万人と殺してもそれは「平和と安全」のためだと言われ、決して「狂気」「キチガイ」「非人道」などとわめきちらされることはない。それに対決して革命勢力が革命戦争をやりはじめると、一斉に「狂気」「キチガイ」「非人道」などとわめきちらすのである。この事は、ブルジョアジーは決して人命尊重など本心で考えた事はなく、革命

二次大戦という帝国主義強盗どもが何らユダヤ人問題を解決することの出来なかつた戦争の中の一つの産物として、戦後一九四七年一月、国連という反革命機構で、パレスチナ分割案が採択され、パレスチナ、アラブ大衆を暴力的に排除して形成されたのである。イスラエル反革命国家が、パレスチナ、アラブ大衆を暴力的に排除して形成された事が、イスラエルとパレスチナ・アラブ人民との戦争の原因である以上、イスラエル反革命国家を解体することなしには事態の解決はありえない。ところでイスラエル反革命国家は、バツクに、第二次大戦をやつた諸帝国強盗を持つており、その帝国主義の成長と共に成長した独自の長い歴史的な一つの特徴あるイデオロギー、精神を持つていたので、イスラエル反革命国家を解体するためには、それらとも対決しなければならぬ。すべての犯罪の根拠は帝国主義であり、一九世紀と二〇世紀にかけて帝国主義が形成される時期に植民地支配を通じて民主主義が暴力と反動に転化したこと、また、それによつて、キリスト教が反動化し、キリスト教のブルジョア的ヨーロッパ史の帝国主義思想として一八九四年のドレフユス事件を中心とする反ユダヤ主義、ユダヤ人迫害があつたこと、これに対抗して一八九七年第一回シオニズム世界会議が行なわれたが、このシオニズムをより促進したものこそ、ヨーロッパ・プロレタリアートの一九二〇～三〇年代の全面的敗北、つまりナチス・ドイツの西欧全体に対する覇権の確保とユダヤ人六〇〇万の殺戮があつたこと、これらが大きな根拠であり、それゆえ、帝国主義に対決し、民主主義を越え、キリスト教を越え、ファシズムに勝ち抜ける思想を持つたものが、全世界で登場することが必要なのである。

それは、共産主義思想であり、プロレタリア世界革命であり、そ

れが現実に行なうことは、第二次大戦を越えるプロレタリア世界革命戦争以外ではありえない。

ブル新は、なんの関係もない日本人がなんでイスラエルなんかで、とかぬかしているが、関係もあり、大ありなのだ。第二次大戦、日本帝国強盗がこの戦争に加わっていたというだけでも、イスラエル国家形成に手を借しているうえに、まして、日本帝国強盗は日独伊と協同し、ファシズムとして、ユダヤ人大虐殺を助長する立場にあり、それゆえにその対極にアラブ大衆の暴力的排除の根拠としてのシオニズムを形成させることに手を借しているのだ。

パレスチナ解放闘争は、同時に日本に労働者階級の闘争任務でもあることは以上の簡単な説明で明らかである。パレスチナ解放人民戦線(PFLP)と赤軍の革命的団結万才!

五 革命はきれいな事ではない!

岡本のお父さん! あなたは、前世にどんな悪い事をしたのだらうか、あのキチガイ息子どもが、といったことを話されたそうですね。前世にした悪いこと、それは、日清戦争であり、日露戦争であり、第一次戦争であり、第二次戦争であり、朝鮮戦争であり、ベトナム戦争です。こんな悪いことをしたら、因果応報といって、革命戦争で報いられる以外にないのです。昔、青年達は、侵略の目的で、殺し尽し、焼き尽し、奪い尽し、キチガイのようなことをやったし、今日も世界で多くやっています。だが、岡本青年は、決して侵略の目的で、無差別殺人をやったではありません。革命の目的で、全世界無差別ではなく反革命イスラエルを選んで、アラブ人民にいわせれば「何の罪もない」市民ではなく、全くの「有罪市民」であり、一昨年にはアラブ人民何千万人を殺したにくむべきイスラエル人を、

れば、また一人でも多ければ、それだけベトナムでの血ぬられた歴史は早く終わるのです。人殺しは悪いことだ、といって、革命の方の人殺しに反対するのは、それだけ反革命の方の人殺しに賛成しているのです。

岡本のお父さん! あなたの息子はキチガイではなく、立派な誇るべき息子だという事がわかりましたか!? 私は、同志岡本公三君達世界赤軍三兵士のイスラエルへの革命戦争を断乎支持します。

非人道、キチガイとわめく諸君!! ベトナム反革命戦争にむけて非人道、キチガイと何回わめいたことがあるか!? イスラエルのアラブ人殺しにむけて非人道、キチガイと何回わめいたことがあるか!? 日本から今日もナバーム弾がベトナムに送られ、米軍機が飛び、空母が、ベトナムに行つて何万何十万の殺しをやっていることに対して一回でも反対して闘争したことがあるか!? ないのだったら、今回このことに対してわめくのはやめて中立の立場をとれ! ブルジョアジーの味方はするな!!

六 組織せよ、組織せよ、組織せよ!

PFLPと各国過激派の関係を調べる、という形で、ICPO(国際刑事警察機構)——各国警察と、我々日本の赤軍、西独赤軍、フランス、イタリア、アメリカなどの左翼の、熾烈な国際的闘争の攻防が現在続いている。我々はこの攻防に勝ち抜かねばならない。

それは、日本の我々にとっては、突撃とか退却とかいった、戦術の問題ではない。組織の問題である。戦術は、組織の作戦として行なわれるのでないなら、戦術に組織は従属され、それは、自分の組織がない場合、他人の組織にむかって退却せよ、とかいった操作主義的かかわりあいをすることになる。敗北主義からは何も生まれは

また、そのイスラエルを支えて訪問しているものを、區別して、それらへ戦争をしかけたのです。これは何という違いではないでしょうか!? 前世では、侵略のため無差別殺人をした。現世ではこれに報いるために、革命のため「無差別」殺人をした。第二次大戦を、青年たちは、はるかに越えているのです。革命はキレイゴトではありません。ブルジョア社会の腐れきったものの中から成長するのであって、この腐れきった社会の外に何か純粹にきれいなものとして革命があらわれるのではないのです。きのうまで、ベトナムの戦場でブルジョアジーのために殺しをやっていた兵士が、今日はアメリカで反戦闘争に加わり、こうして、血ぬられ、汚れた過去から、徐々にキレイなものに成長して行くのです。出来るだけキレイに、フェアに、選択的に、一層反革命的なものをそうでないものよりも優先させて殺す方が、一層ましであるが、革命はそう一挙にキレイゴトとして成長はせず、徐々に血ぬられ、汚れたものの中から成長するものである以上、むしろ、青年達が第二次大戦の時のように、帝国強盗のために血ぬられたことをやるよりも、帝国強盗やシオニストに対決するために、血ぬられたことをするようにしたこの巨大な成長、そう、何百万何千万人の死の上に、何十年の歴史をかけて成長しているこの巨大な成長こそ、誇りに思うべきではないでしょうか? この成長の中で、よこれを徐々に落とすべきであって、よこれを気にして、この成長を抑えつけることは、それは、それ以上のブルジョア反革命の血ぬられた歴史を許すのみです。

ベトナムで米軍兵士を殺すこと、日本で米軍基地を壊すこと、ナバーム弾を送っているのを粉砕すること、アメリカで米軍基地を粉砕すること、日本、アメリカで反革命を殺すこと、それが一秒早くしない。戦闘的敗けし魂をもって、とにかく、戦術よりも先ず、組織化を考え、一にも組織、二にも組織と、組織しなければならぬ。ベトナムは今、前代未聞の大爆撃下にあつても、「偉業達成の機到来せり! 祖国の独立と自由のため、全将兵は、全戦場で、勝機の中、突撃突進せよ!」と云つて大攻撃を展開している。パレスチナは、イスラエルの報復に対しては断乎闘うとして、一九七〇年九月の何千万の死後であっても頑張り続けている。西独赤軍も、米帝の機雷封鎖、北爆に対して断乎として基地爆破を闘っている。

このような時、我々はふみとどまつて、断乎として、「組織せよ、組織せよ、組織せよ!」をあいことばに、政治警察との国際一国内での熾烈な組織戦に勝利し抜かなければならぬ!

連赤事件の自己批判は整党整風として結実せしめ、「我々の党」の党綱領を確立し、その下に首尾一貫して、全戦線で、組織せよ、組織せよ、組織せよ! である。共産主義者同盟赤軍派は、世界共産党—日本労働党として自己を打ち鍛えなければならぬ!

世界共産党—世界赤軍を組織せよ、組織せよ、組織せよ、組織せよ!!

岡本救援にカンパを!

東京都港区西新橋二一六—八浅野ビル

救援連絡センター気付

テルアビブ闘争救援委員会

テルアビブ支援委員会通信・特別号

8・16二戦士追悼集資料集

価二〇〇円 お申込は序章社へ

デイゴの花咲く沖縄からおくる熱いルポルタージュ!

琉球共和国

竹中 芳

・1200円

この世の最基底部に解放の主体を求めあぐない旅を続ける竹中芳が、情歌と酒と娼婦の世界を通して、こめられた沖縄民衆の怨念をえぐり出し大団ニッポンの醜さを撃つ

「石油戦争」と日本経済

欠陥車と企業犯罪

職業と人生への問い

労働のなかの復権

若い生命を自ら断った沖縄の学生運動活動家の手記!

名前よ立って歩け

中屋幸吉遺稿集

沖縄戦後世代の軌跡

・780円

に艶れたこのひとつの記録。

宮崎健夫 / 世界最大の石油輸入国として資源の確保に死

活を賭ける日本の世界石油戦争における位置を明解に分

析し、産油国Ⅱ第三世界、国際石油資本、日本の帝国主

義的進出との間の死闘をなまましく描く! ●350円

伊藤正孝 / 欠陥車をかくものさばらせたものは何か。消

費者運動を弾圧するために企業と権力によって企らまれ

たユーザーユニオン事件の真相を徹底的に追究した朝日

新聞記者の痛烈な告発と警世の書! ●350円

加藤尚文 / 人事管理戦略として企業サイドから展開され

て来た。生きがい論。そこへ合理化の嵐が吹きすさぶ労働

現場から労働者にとって職業とは職業意識とは何かを

とらえ、現代の労働と人間との関係を追究する ●350円

熊沢 誠 / 体制内装置として固定された労働運動の戦闘

的再生の爲には何が必要か。労働者が日常をおくる企業

という場の疎外と差別の構造を分析しつつ、新たな労働

組合運動の可能性を提示する著作。 ●350円

沖縄戦後世代の典型ともいえるきびしい青春を全的に生きぬき、沖縄の現実を突き破るたたかいのさなかに、ついに艶れたこのひとつの記録。